



日本伝道 80周年 記念 特集号

聖徒の道 1981 10

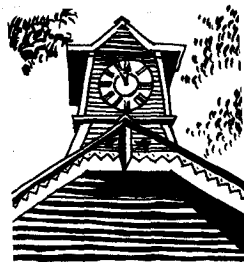
あす 明日を待ちつつも 今日^{きょう}は働け
刈入れ近づき 主は呼びたもう
刈入れ時には 倉^{ぐら}に納めよ
罪の世あけゆく 福千年に

(讃美歌215番)



聖徒の道 10月号

もくじ



日本の人々に寄せるメッセージ	4
伝道80周年を祝して	ゴードン・B・ヒンクレー 6
この記念すべき時に	菊地良彦 7
伝道80周年を迎えて	8
日本の教会80年の歩み	11
岩倉使館団エピソード	25
日本伝道80年の歴史	26
ヒーバー・J・グラント大管長とビート産業	渦沼誠二 28
教会幹部、初の来日	30
佐藤龍猪兄弟をたずねて	32
回想記：讃美歌にまつわる思い出	柳田聡子 34
歴代の伝道部長	36
主のみ手となって仕えた故山中健次兄弟を偲んで	ドウェイン・N・アンダーセン 38
かつての伝道部長より	40
座談会：『伝道に捧げたわが青春の1ページ』を語る	48
私の熱き思い出	福嶋克明 56
伝道—その価値ある体験を終えて	豊田ふさえ 58
大きくふくらむわが家の夢	松下承子 60
私の証：伝道に出られる祝福	除村秀輝 62
“伝道に生きる”	64
ステーキ部／伝道部、ワード部／支部一覧	66
日本における教会の統計記録	68
すなっぷ教会堂	69

大管長会：スペンサー・W・キンボール、N・エルドン・タナー、マリオン・G・ロムニー、ゴードン・B・ヒンクレー；十二使徒評議員会：エズラ・タフト・ベンソン、マーク・E・ピーターセン、リグランド・リチャーズ、ハワード・W・ハンター、トーマス・S・モンソン、ボイド・K・バッカー、マービン・J・アシュトン、ブルース・R・マッコンキー、L・トム・ペリー、デビッド・B・ヘイト、ジェームズ・E・ファウスト、ニール・A・マックスウェル；顧問：M・ラッセル・バラード・ジュニア、ローレン・C・ダン、レックス・D・ピネガー、チャールズ・A・ディディエ、ジョージ・P・リー、F・エンツィオ・ブッシェ

聖徒の道 10月号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会
 東京都港区南麻布 5-10-30
 印刷所 株式会社 精美社
 配 送 東京ディストリビューション・センター
 東京都世田谷区上用賀 4-9-19
 定 価 年間予約 2,200円 1部 180円
 海外予約 2,200円

INTERNATIONAL MAGAZINE FIMA 0620 JA Printed in Japan

郵便振替口座番号 東京 0-41512
 口座名 末日聖徒イエス・キリスト教会
 東京ディストリビューション・センター

A photograph of the exterior of the Tokyo Cathedral at dusk. The building features large, light-colored stone columns and a dark, ornate entrance. In the foreground, a rectangular stone sign is illuminated from below, casting a warm glow. The sign contains the text '東京神殿' in large characters, followed by '末日聖徒' and 'イエス・キリスト教会' in smaller characters. The sky is a deep twilight blue, and some trees are visible in the background.

東京神殿

末日聖徒

イエス・キリスト教会

時の流れは、汗と涙と苦しみという炎の中で、希望という輝ける宝石を練り上げる。

主の真理がこの「日の出ずる国」にもたらされてから、80年の歳月が流れた。この1世紀になんなんとする苦闘の歴史の中で、回復された真理という原石は今や永遠の輝きを放つに至っている。

この記念すべき実りの時に寄せて、伝道開始80周年特集号を皆様にお届けしたい。「故きを温ねて新しきを知る」の言葉にあるように、先人が受けてきた精練の炎から、あなたが練り上げる宝石の何たるかを見いだしていただければ幸いてある。

福音の種を携えて

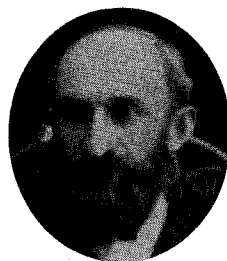
— 開拓の宣教師 —



(前列左よりヒーバー・J・グラント、ルイス・A・ケルチ、後列左よりホーレス・S・エンサイン、アルマ・O・テイラー)

日本の人々に寄せる メッセージ

初代伝道部長(後第7代大管長)
ヒーバー・J・グラント



いと高きにまします神の聖徒として、また伝道者として、私は皆さんに御挨拶を申し上げ、私たちの持っている大切なメッセージを深く考察されるようにおすすめします。……

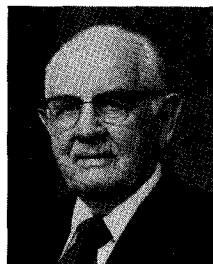
私たちは皆さんが私たちと同じ父なる神の子供であることを知っております。……私たちの使命は義務のひとつであって、私たちは、神のみ言葉とみこころとを世に広めるよう、神に命じられているのです。

神の尊い権能により、私たちは今、日本の人たちのために鍵を使って神の王国の扉を開きます。……私たちは金で買うことのできない祝福を皆さんに差し上げます。これは人間の祝福ではなく、また人間の力によって与えられる祝福でもありません。光明と真理のもとにおいでなさい。そうすれば、必ず皆さんの心は平和と愛と喜びとに満ちあふれるであります。

(1901年9月日本の伝道にあたって)

大管長
スペンサー・W・キンボール

Spencer W. Kimball



現在，世界各国にはたくさんの日本人が住んでいます。

日本の方々はそれぞれの国の言葉を覚えて伝道することができるのです。もちろん日本における伝道は日本人の手で行なうべきだと思います。

この国に住む1億1000万の人々に福音を説くことは皆様の責任です。次いで皆様は、海を越えて大陸へ渡り、何億もの中国人に福音を伝えることになります。

もし日本の聖徒たちが、日本国内で現在伝道に携わっている1,000人の宣教師をまかなえたとしたら、やがて1万人の宣教師が中国本土へ行くこともできるでしょう。

(1975年8月日本地域大会にて)

伝道80周年を祝して



副管長

ゴードン・B・ヒンクレー

日 本の地に回復された福音が伝えられて80周年記念の年を迎えることは私の心からの喜びです。

この伝道の歴史は、献身と信仰、予言の織りなすひとつの物語と言えましょう。ヒーバー・J・グラント長老とその一行が到着した1901年、彼らの前途には発展への明かるいきざしは見えませんでした。しかしグラント長老はひとりの使徒として、予言のみたまを通して次のように予言したのです。

「教会はこの良き地において、必ずや力強く成長する時が来るであろう。」

私は今日の日本の聖徒たちと親しく交わりながら、主の力ある、素晴らしい奇跡の業を目のあたりにしています。これはとりもおさず、主が祈りに応え、80年前のその予言を成就するため、御自身の目的を果たしてこられたからなのです。

私は、グラント長老が日本国中に立派な成長を遂げた伝道部と力強いステーク部が組織されている様子を見て、会心の笑みを浮かべておられるだろうと確信しています。

この業を成就するために力を尽くし、犠牲を捧げられたすべての方々に心より賞賛の言葉をお送りいたします。また、主の業の上に、そして日本の人々と国家の上に、絶えず主の祝福がありますよう心よりお祈りいたします。

この記念すべき時に



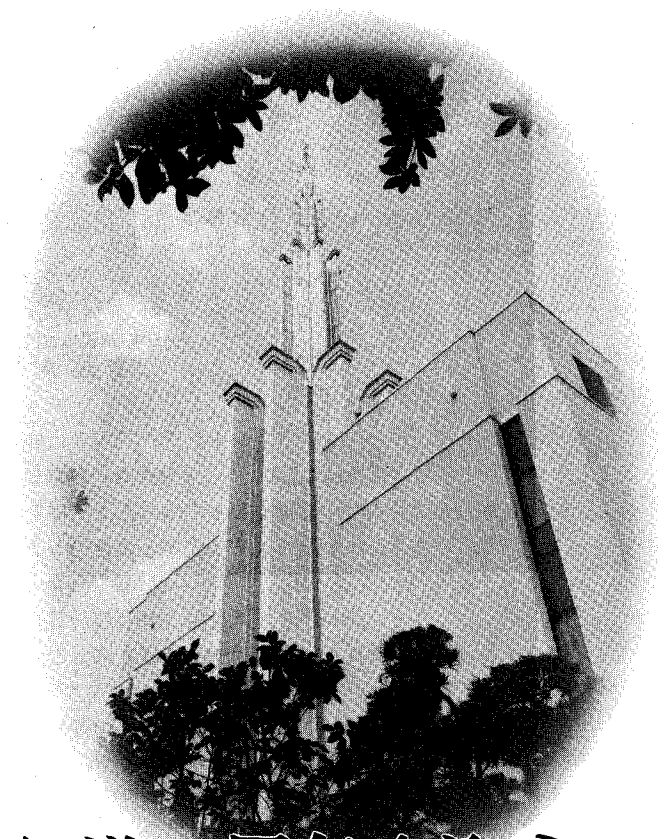
日本・韓国地域代表役員
菊地良彦

1901年8月13日、ヒーバー・J・グラント長老は日本人に宛てたメッセージの中でこう言われました。「……神の尊い権能により、私たちは今、日本の人たちのために鍵を使って神の王国の扉を開きます。……そして、皆さんに申し上げます。光明と真理のもとにおいでなさい……。」(『偉大な発展の国、日本への言葉』 *Millennial Star* 「ミレニアル・スター」 1901年9月26日付, pp. 625—27)

神の使徒の言葉を読み、今日本伝道80周年記念日を迎えるにあたり、私の全身は喜びでいっぱいです。それと同時に、多くの先人(伝道部長や宣教師の皆様)のたどった並々ならぬ精進と御苦勞を思う時、胸に熱いものが込み上げてきます。先人が開拓して下さった「遺産」を、この「めぐり会えた光の道」を、日本の聖徒全員が一丸となって喜んで伝えようではありませんか。この「光の朝」のおとずれこそ、日本を、そして世界を救う道なのです。

「頭の先だけの信仰」、「口の先だけの信仰」では、この偉大な「神の世界」の一大事業を完成させることはできません。あくまでも、日常の「清めある行い」の修業、すなわち、「主が教えられた道を清く歩み、一人一人が他の人を導くという生活」をする時に、この大和の地に神の世界が実現されるに違いありません。

イエス・キリストのみ名によってお祈りします。アーメン。



伝道80周年を迎えて

1901年9月、日本に伝道の第一歩がしるされて今年で80年を迎えた。誠に記念すべきことである。私たちは今、過ぎし80年の月日に思いをはせながら、その歴史が語りかけるいくつかの事実を目を留めてみたい。

80年の歴史の中でまず特筆しなければならないのは最初にアメリカより来日した4人の宣教師（グラント、ケルチ、エンサイン、テイラーの各長老）たちについてであろう。新生の地、日本に“真理の種”を携えてきて福音の道を切り開いたその業績はあまりにも偉大である。

当時の様子や彼らの思いを伝える記録の数々を見てみると興味深いものがある。ここでその一部を紹介しよう。

4人のうちのひとり、ヒーバー・J・グラント長老がその手記の中で語った日本についての印象である。

「岸壁には何百もの人力車が、獲物をねらうハゲタカのように待ち構えていた。……4人の宣教師は、奇妙な衣服を身にまとった、小さな、浅黒い顔の日本人の中に進み

出た。……こうして彼らは、人種、言語、習慣、服装、住まい、町並み、すべてアメリカとはまるで違う別世界の中に放り込まれたのである。」

また、日本の地を奉獻するため捧げられたグラント長老の祈りについて同僚のテイラー長老はこう回想している。

「彼（グラント長老）の舌はゆるまり、御霊が力強く彼の上にとどまり、神の御使いたちが、私たちのそば近くを囲んでいるのが感じられた。彼のくちびるからあふれ出る言葉は、私たちの関節と骨の髄を貫き透し、私たちの胸は内に熱く燃えた。私はかつてこのように力ある、安らかでしかも力強い祈りを経験したことはなかった。私たちは喜びのあまり、幼な子のように泣いた。」

* * * * *

80年の歴史を眺めてみる時、そこに教会の発展のために尽くした数多くの人々が見いだされる。勧告や励ましを与えてくれた大管長会をはじめとする教会幹部や指導者、伝道の業に献身的に働いた伝道部長や宣教師、そしていつも変わらぬ信仰をもって自らを捧げた聖徒たちなど、その人々は数え切れない。この80年の歴史を支えてきたも

のは、そうした人々の愛と犠牲による力と
言えよう。

また、過去の歴史的事実から日本の地が主より祝福されていることを感じないではいられない。24年ぶりの伝道の再開、発展する中であって幾度となく実現した教会幹部の訪日、1975年と1980年の2度にわたる地域大会、そして東京神殿の完成など、そ

の祝福された出来事は数えあげれば際限がない。日本の聖徒たちはそれらの祝福に浴する度に、信仰を燃やし、証を強くしていったのである。

今や、日本の末日聖徒の家族の中には2代目、3代目を迎えている人たちもいる。聖餐会で涙ながらに次のような証を述べた母親がいた。

* * * * *

現在、伝道の業はますますその歩みを速めて、日本各地に広められている。しかし、その業においてははまだアメリカ人宣教師に負うところが大きい。かつてキンボール大管長が言われた次の言葉を私たちは思い起こす必要があろう。

「……日本には1億以上の人々が住んでいます。そのことを考えると当然ながら、その伝道は日本人の手で行なうべきだと思います。日本に住む人々に福音を説くことは日本人の責任です。」

私たち日本の聖徒は、今こそ自分たちの力で伝道することを考えなければならない。主もそうすることを期待しておられる。求められるのは伝道の業ばかりではない。指導力という面においても、私たちは多くのことを期待されている。

「私は自分の子供が、また孫が末日聖徒として立派に成長している姿を見ることができ、何よりもうれしいです。これは私にとって最高の祝福です。神様に心から感謝しています。」

この言葉にこそ、日本の教会歴史を象徴する証が込められているのではないだろうか。

最近の世界的な傾向として、ステーキ部やワード部の著しい増加があげられる。指導者の育成がそれに追いつかないほどである。日本でもこの8月、全国各地で指導者訓練プログラムが実施されたが、指導者の訓練は今後も大きな課題として残されるであろう。

日本の教会は今、このような意味で新しい時代を迎えようとしている。日本・韓国地域代表役員の菊地良彦長老も今年の春、日本の指導者に発想の転換を唱えられた。今年はそれを実行に移す良い機会ではないだろうか。

日本伝道80周年の1981年——単に歴史の節目を迎えただけではない。それは日本の教会がさらに飛躍を期すための新たなステップの年と言えよう。

日本に回復された福音が宣へ伝えられて80年。この間、数々の歴史的ドラマが展開されてきた。今、その主なものをまとめてみた。



日本の教会 80年の歩み

伝道の開拓時代

(1901-1924)

日本伝道の黎明

19 01年2月14日、ソルトレーク神殿における十二使徒定員会集会の席上、大管長会のジョージ・Q・キャノン副管長によって、日本に伝道部を開設するという発表がなされた。そして十二使徒定員会会員であったヒーバー・J・グラント長老が、日本における最初の伝道部を管理する責任を受け、他に3人の忠実な聖徒が彼に同行するよう選ばれた。

グラント長老は当時44歳であったが、それまで伝道の経験は全くなかった。彼に随

行するよう召されたのは、西部諸州で3年間の伝道生活を終えたばかりのホーレス・S・エンサイン、アメリカ、イギリス、ドイツで10年間福音を教える経験を持ったルイス・A・ケルチ、それに後に日本で19歳の誕生日を迎えるアルマ・O・テイラーの各長老である。

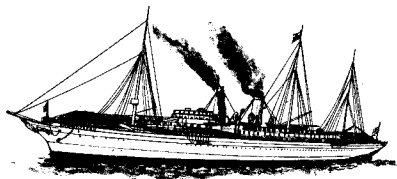
出発に先立つ1週間前、ソルトレーク・シティの歴史的建物、ビーハイブ・ハウスにおいて、彼らのために壮行会が催された。その席上、ロレンゾ・スノー大管長は日本での伝道活動について彼らに次のような訓話を垂れている。

「ノアは120年もの間、人々に福音を説き続けた偉大な人であった。彼はその務めを完うしたが人々が、彼を拒んだためそれは失敗に終わった。しかしながらノアは務めを果たすことによって、彼自身に昇栄と栄光をもたらしたのである。

近日、日本に出発しようとする諸兄、4人の同胞^{はるか}に対して主はその業が成功するであろうという啓示は与えられていない。しかし、主は「日本へ行くこと」が義務であると示されたのである。結果について心配する必要はない。ただ、主のみたまの示したもうことに注意深くあって、自分自身の知恵によらず、神の知恵によって管理するように……。」（日本東京伝道部「月刊ニュース」1977年9月20日）

最初の宣教師たち

4人の一行は、ソルトレーク・シティーより汽車による2日間の旅をし、7月26日オレゴン州ポートランドに到着した。そこで数日伝道をした後、7月30日午後5時30分、ブリティッシュ・コロンビア州バンクーバーより『エンプレス・オブ・インディア』号に乗船し、日本に向かった。



エンプレス・オブ・インディア号

4人は当初、船酔いで苦しんだが、その後は順調に船旅を楽しんできた。彼らはデッキに出て運動をしたり、聖典の勉強などをしたりした。当時、教会には日本語に通

じた者はひとりもなく、しかもそれを学ぶ英語の教材もなかった。したがって彼らは日本に着いたら、言葉に対して神の助けがあるよう祈るばかりだったという。

こうして船旅を続けた彼らは、8月12日朝10時、無事に目的地の横浜港に着いた。そして検疫をすませた後、最初の宿舎である横浜のグランドホテルに向かうのである。到着するなり、まず4人を悩ませたのが言語、習慣、文化な



どの違いであった。人力車に乗るグラント長老当然のこととは言え、その悩みは並大抵のことではなかったであろう。

伝道の第一歩

彼らは後に、自分たちの到着がすでに日本に知らされていたことを知った。さらにジョセフ・スミスが経験したように他のキリスト教関係者が彼らを喜んで受け入れていないことも知った。

キリスト教指導者は団結して、新聞社に当教会の中傷記事を投稿したり、日本で布教させないよう政府に嘆願書を提出したりしていた。また、ホテルや食堂などに宣教師を入れないよう警告もしていた。

到着の4日後、彼らは月35ドルの借家(5部屋つき)を見つけることができた。そして8月25日、最初の求道者がこの家で教えを受けることになったのである。求道者は

広井氏といい、高い教育を受け、英語に精通した人であった。彼は終生、教会の良き友、福音の擁護者となった。

先にも宣べたように、日本での伝道は一部の者に反対されたり、新聞に事実無根の記事が掲載されたりしたため、政府も容易に許可しなかった。そこで彼らは意を決して日本の地を奉獻するため祈禱会を催すことにした。断食日曜日にあたる9月1日の朝、彼らは家を出て、20分ほど歩いたところの森にやって来た。横浜市の南部、外国人住宅の立ち並ぶ一帯と入江との間にはさまれた丘の上のひっそりとした場所である。

ここで彼らは讃美歌『感謝を神に捧げん』を歌って会を始め、各々が順番に祈った。次に讃美歌『恐れず、来たれ聖徒』を歌い、続いてグラント長老が力強い奉獻の祈りを捧げた。その後、グラント長老は、かつてオリブ



森に入る4人の宣教師

山でパレスチナの地を奉獻した際、使徒オルソン・ハイド長老によって捧げられた祈禱文を読み上げた。最後に4人は証を述べ合い、讃美歌と祈りをもってその会を閉じた。こうして日本の地は、神に捧げられた聖なる地となったのである。

苦闘を物語る伝道の業

10月20日、伝道の中心は横浜から東京に移され、四谷霞岡町に伝道本部を設置することになった。以来、彼らの献身的な伝道の業が始まる。

半年後の1902年4月8日、ふたりの日本

人が最初のバプテスマを受けた。宣教師たちの働きによるその改宗者は神道の神主であった中沢氏と、宣教師の通訳を務めていた広井氏であった。

グラント長老は1902年4月、総大会のために一時帰国していたが、7月17日、夫人と令嬢、およびエンサイン夫人らを伴って日本に戻ってきた。



最初の改宗者。
中沢氏(後列右からふたり目)と広井氏(前列右)

その一行の中にはフェザーストン長老夫妻、ジャービス、ストーカー、ヘッジス、ケインの各長老も含まれている。彼らは翌年解任されるケルチ長老らに替わってその務めを果たすことになっていた。

1903年4月22日、これらの長老たちは日本各地に支部を開設するため東京を発った。フェザーストン長老夫妻とヘッジス長老は千葉へ、ジャービス長老とストーカー長老は直江津へ、そしてエンサイン長老とケイン長老は長野へ行くよう責任を与えられた。伝道の難しさは今も変わらないが、ケイン長老の伝える長野の町の様子はそれを如実に物語っている。

「人口4万ほどのこの町の人々は、仏教に篤く、話しかけるのがなかなか難しい土地柄である。」(日本東京伝道部「月刊ニュース」1978年1月20日)

グラント長老、解任さる

使徒であり初代の日本伝道部長であったヒーバー・J・グラント長老は、偉大な信仰と深い霊性とを具えた人であった。後に大管長となったことでもそれは伺い知れる。彼は主のあらゆる戒めに完全に従っていた。そのへりくだった精神と強い証は、東京からユタの一友人にあてた手紙の中によく表われている。

「……私たちには誘惑に近づく権利はありません。事実また、正直に主の祝福を求められないようなことを行なったり、口にしたりする権利もありません。また恥ずかしくて妹や恋人を連れて行けないような場所に行く権利もありません。良きみたまは悪魔のいる場所にはけっして行こうとはしないものです。……」（日本東京伝道部「月刊ニュース」1978年1月20日）

1903年8月23日(日)、グラント長老は大管長会から一通の電報を受け取った。彼を日本での伝道から解任するという内容であった。

9月6日(日)、東京での断食集会でエンサイン長老が2代目の伝道部長として召された。そして2日後、グラント長老とその家族は横浜港より帰国の途に就いた。グラ



▲日本の食事を味わうグラント長老(左)
▼ありし日のグラント長老(右)

ント長老は日本に2年余りいたが、日本語や日本人について理解するまでにはいたらなかったという。だが、彼はいつの日か、日本にも偉大なみ業が始まることを確信しつつ、日本を去った。

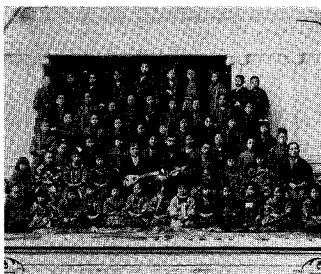
テイラー長老とモルモン経日本語訳

教会への迫害や攻撃はその後も続いたが、それにかかわらず、東京をはじめ、千葉、長野、直江津、仙台、甲府、盛岡、札幌へと福音伝道の業は拡げられていった。そして1903

年には初めての一般集会が持たれるまでになり、やがてモルモン経を日本語に翻訳しようという動きも出てきた。そうしてその話が決定したのは1904年1月11日に開かれた宣教師大会の席上である。

初め各宣教師はそれぞれ、任意の章を翻訳し、最後にそれらを持ち寄って編集しようとした。しかし半年後、この方法はスムーズに進まないことがわかって、テイラー長老がひとりでこの業を引き受けることになった。翻訳の事業は初め、訳文をローマ字にし、次いでこれを邦字に直すという二段の方法をとった。

1905年7月4日、テイラー長老が伝道部長に任命され、それに伴ってケイン長老が助手となり、翻訳の業を手伝うことになった。最初の翻訳は2年足らず

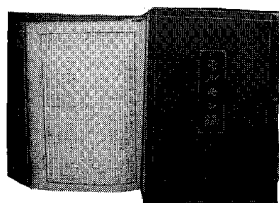


当時、教会に集っていた日本の人々と宣教師たち

で完了したが、次に改訂を施すのに1年半も要した。そうするうちに原稿が汚れ、見苦しくなったため、ふたりの日本人がこれを清書し、テイラー長老とケイン長老がその原稿を校正することにした。それまで訳文は口語体で書かれていたが、日本人は文語体を採用するよう強く主張していた。

テイラー長老は当時、自分の口語体の訳文を優れた文章に練り上げることのできる日本人は数人しかいないことを知り、文語体にする方がはるかに容易であることを悟って文語体を採用することに決めたのである。

この文語体訳文の批評には何人かの日本人が関わるが、テイラー長老は最終的に著名な坪内逍遙と夏目漱石の両氏に依頼した。



テイラー長老訳のモルモン経

ところが彼らはそのような時間がないという理由で断わった。しかし夏目漱石は東京大学を卒業したばかりの文学青年、生田広春氏を紹介してくれた。テイラー長老は生田氏が有能な人物であることを知って、彼にその仕事を依頼することにした。

生田氏は1908年8月1日、訳文を文語体に直す仕事にとりかかり、1909年1月31日それを完了した。このようにして翻訳の事業を終え、いよいよ印刷に付されることになった。テイラー、ケインの両長老は校正に心血を注いだ。一応4校まで、校正をしたが、部分的に6,7校を重ねるほどの大仕事であった。そして1909年7月30日に最終校正を終えたモルモン経は10月10日、とうとう完成をみたのである。

アルマ・O・テイラー長老はほぼ9年間にわたって日本に留まり、その間、おもにモルモン経の翻訳と出版に力を尽くした。その業績は高く評価され、日本の教会歴史にいつまでも語り継がれていくものである。

教会との出会いを経験する忠実な聖徒

1909年秋、伝道本部は四谷霞岡町から牛込区薬王寺町へ移された。当時、日本で伝道に専念していたのは先にも紹介したケイン長老ら、10人ばかりの宣教師であった。彼らを通して教会との出会いを経験する日本人がこの頃から少しずつ見られるようになってきた。その中には、日本の教会発展のために尽くした高木富五郎兄弟、彼の実兄、高橋仁吉兄弟、そして熊谷たまの姉妹らがいる。彼らは今は亡き人たちである。

高木富五郎兄弟の話によると、当時の日曜学校は会員と求道者合わせても10人という小さな集会で、いつも宣教師による教会略史の勉強だったという。M.I.A.(相互発達協会)も伝道部長や宣教師の説教が中心であとは合唱とかゲームなどの楽しい集いだった。小さいながらも春秋の年2回、伝道本部で大会が催されていた。札幌、盛岡、甲府から宣教師が皆集まって敬虔な集会を持った。そのような場で語られるテイラー伝道部長の話は実に権威ある素晴らしいものだった。彼の日本語は立派で漢文調だった。宗教的で威厳のある、その確信に満ちた口調に人々は深く心を打たれたという。しかしながら、日本で伝道が開始されて8年目、しかも伝道に対して迫害のあった時代でもあり、宣教師たちの苦労は並大抵のものではなかった。教会へ集った日本人たちも本格的に福音を会得しようとする人が

少なかったようである。

当時、日本語に翻訳されていたものは、ストーカー長老訳の「末日聖徒イエス・キリスト教会略史」とテイラー長老訳の「モルモン経」「信証講義」の3冊、その他にパンフレット数冊と讃美歌が部分的に翻訳出版されているにすぎなかった。

現在、東京神殿宣教師、および祝福師を務める奈良富士哉兄弟が教会を知るのとはそのような時で、1911年のことである。当時

の伝道部長はエルバート・D・トーマス長老。彼は温厚な学者タイプで、その説教には人を魅きつけるものがあつたという。また、大の日本びいきで日本で生まれた長女には「千代子」と命名するほどであつた。

そして5代目の伝道部長にはH・グラント・アイビンス長老が召された。彼は年若く、日本語が非常に上手で、仏教にも興味を示す人であつた。高木富五郎兄弟とは仏教の研究で時々議論に花を咲かせたことも

伝道部開設の陰に

「**当** 教会の幹部は、福音が遠からず有利に宣べ伝えられるべき国として、日本に関し最近少々心を動かされたり……」

これは1895年「コントリビューター」誌に掲載された論説だが、その後に続けて当時の日本における文明の進歩をとりわけ高く評価し、今後慢心におぼれることがないなら、この東洋の国民の急速な進歩発展を妨げるものは何もないだろうとまで言い切っている。

1901年4月6日発行「デゼレト・イブニング・ニュース」紙において、ロレンゾ・スノー大管長は、日本の政府高官の一行がソルトレーク・シティを訪れた時のことを次のように述べている。「この一行はユタ州およびユタ州がモルモン教徒によって植民開発された方法に多大の関心を寄せた。……また一行は、われわれがこれまで日本に宣教師を派遣していないことに著しい驚きの言葉を発した。このことは日本国民が進歩向上する国民であるという知識と共に、今に至るまで私の心に残っているところである。」

この高官の一行というのは、実は1871年(明治4年)にアメリカに渡った岩倉使節団を指している。その中に伊藤博文が同行していた。

「伊藤博文氏は、モルモンに深い関心を示し、モルモンの歴史の話をすると非常な注意

をもってそれを聞いた。氏は海綿が水を吸う如く知識を吸収する興味ある性格の人物であつた。」これは、知己となつたアンガス・Q・カノン氏の言葉である。その後、1901年に日本におりたったグラント長老らの一行を、氏は個人的に大変歓迎したと言う。

それまで教会は、伝道活動をキリスト教のある程度浸透した国に限定していた。それが今や、宣教師は「異教徒」の国におもむくのである。1901年4月の大会において、その先駆者となつたグラント長老は、胸の内をこう語っている。「この企てには多くの『未知数』がある。然り、私が成功すると考えるのは日本人が驚くほど進歩的な民であるからである。もちろん、私の知識は読んだり、聞いたりして得たものである。……しかし、東洋の諸民族の中で日本人は疑いもなく最も進取的且つ聡明な民族である……ある権威者の言によれば、知識を吸収する段になれば彼らは世界のあらゆる民族を顔色なからしめる。」

新生日本の若き指導者たちと間もなく東洋にも福音を広めんとする新しい真実の教会との出会い。歴史の織りなす綾とでも言えるだろうか。(資料：マレー・ニコルズ著「日本伝道部の歴史」第1章参照)

あったという。またアイビンス伝道部長はすでに日本語訳をされていた讃美歌の改訳にも力を注いだ。それは1915年春、ついに出版の運びに至る。

アイビンス伝道部長は同年6月任務を終えて帰国、その後任にジョセフ・H・ステンプソン長老が召された。高木兄弟はアイビンス長老の帰国を前に6月1日、多摩川上流でバプテスマを受けた。続いてステンプソン長老から按手札を受け、真実の教会を見いだしてから5年半にして聖徒の群れの中に加えられた。奈良兄弟も同年6月15日、同じ多摩川の上流でバプテスマを受け信仰生活のスタートを切ったのである。

伝道部の閉鎖

やがて1920年代に入ってから、戦争の気運が高まると共に、日米の関係は政治的に円満を欠くようになり、ひいては当教会に対する迫害も激しさを増してきた。そのため1924年、ついにヒーバー・J・グラント大管長から日本に一通の電報が入り、23年間続いた日本伝道の歴史はいったんその幕を閉じることになる。

この23年間の改宗者は166人。日本での実りはわずかであった。だが、そこには忠実な聖徒たちによる伝道の布石が置かれたのであった。

希望の伝道再開

(1924—1955)

再び福音の光が

伝道部の閉鎖に伴い、宣教師たちは皆日本から引き揚げるようになったが、残るわずかの聖徒たちは日本で最初に長老職に召された奈良富士哉兄弟を中心に一致を図り、活発さを失わないように努めていた。彼らは『棕櫚』と題するパンフレット等により連絡を取り、助け合ってきた。しかし、会員間の連絡は日本の国策に制圧されて思うようにいかなかったことは言うまでもない。

そのような状況の中で、彼らは時のブリガム・ヤング大学学長フランクリン・H・ハリス博士を日本に迎えた。これはかつて伝道部長を務めたアルマ・O・テイラー長老のはからいによって実現したものである。このハリス博士の来日を機会にM.I.A.（相互発達協会）が公式に東京、大阪、札幌に

設立された。奈良兄弟はその間、第7代大管長ヒーバー・J・グラント長老により日本の教会を管理する長老に任命（文書による）されている。これらのことは日本の聖徒たちの力強い信仰の証を反映して余りあるものである。

彼らの働きはやがて報いられる時がやってきた。終戦を迎えて間もなく、日本に駐留する米軍会員の全国的な伝道活動によって、日本伝道部再開の機運が高まったのである。当時、東京に駐留していた海軍士官エドワード・L・クリソード兄弟によってその朗報はもたらされた。そして1948年3月、そのクリソード兄弟が日本伝道部の部長として赴任し、ここに、日本伝道部が24年ぶりに再開されることになったのである。

再び真の福音が宣べ伝えられる祝福に浴



クリソード伝道部長(左)を交えて(右からふたり目は奈良兄弟)

した日本の聖徒たちの喜びようは筆舌に尽くしがたいものがあつた。再開して2年以上、奈良兄弟は東京において在京の会員と駐留軍会員の援助を受けながら、毎日より日集会を開いていた。

教会は駐留軍の末日聖徒を通して食糧を救援したり、福音を伝えたりした。そのような働きと模範は次第に日本の人たちの心をとらえるようになっていった。

現在、東京神殿で奉仕する佐藤龍猪兄弟はそのような時に教会を知ったひとりで、伝道再開後の最初の改宗者であつた。

伝道再開のために最初に遣わされた宣教師はポール・C・アンドラス、ハリソン・T・ブライス、その弟レイモンド、W・マクダニエル、そしてコージ・岡内の5長老であつた。彼らはまず、閉ざされた24年もの間、忠実に信仰を守り続けてきた聖徒た大阪、十三駅近くで街頭伝道をするハリソン・T・ブライス長老



ちの会員記録を集めることに努めた。そして彼らはその人々と軍の末日聖徒によってバプテスマを受けた数人の改宗者と共に献身的に働いた。彼らのその伝道に傾ける努力は涙ぐましいほどのものだったという。

伝道の業を推し進めるにはその拠点となる建物がまず必要であつた。戦争でほぼ廃墟と化した東京で伝道本部の設置場所を見つけるのはほとんど不可能に近かつた。だが幸運にもクリソード伝道部長は、今は美しい東京神殿の建つ港区南麻布のその地に土地を購入することができた。

1948年の感謝祭の日に、クリソード伝道部長および彼を助ける5人の宣教師たちはその恵みを心より主に感謝した。

翌年7月、十二使徒定員会会員のマシュー・カウリー長老が来日し、その建物を献堂した際、次のような予言と祝福の言葉を残された。



マシュー・

カウリー長老

「日本国中、ここに幾つかの神殿が建ち、日本国民は万国の中にあつて義を思い起こさせるしるしとなる日が来る。」東京神殿の完成はその予言の一部が成就したものであると言えよう。



開設間もない高崎支部の兄弟たち(前列中央はレイモンド・C・ブライス長老)

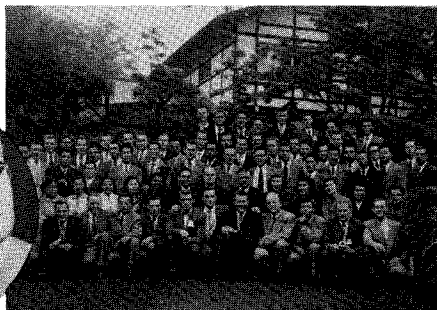
伸びゆく教会

宣教師大会（1952年）▶

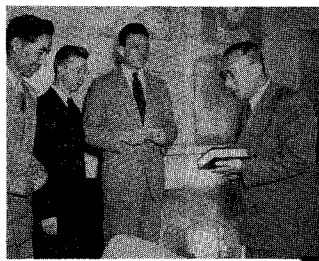
▼マース伝道部長御夫妻

宣教師や会員たちの努力により、支部は札幌、大阪、高崎、前橋、松本と順次開設されていった。1950年4月には初めての姉妹宣教師が名古屋に赴任し、そこで彼女たちによる婦人集会が開かれるようになった。出席者は10人前後と少人数ではあったが、教義の勉強をはじめ、料理や社会見学、バザーの奉仕活動など、バラエティーに富んだものだった。やがてその集会における出席者は少しずつ増え、2年後には扶助協会を組織するまでの調いをみせてきた。こうしてわが国最初の扶助協会が発足するに至ったのである。

この頃から、日本各地には徐々に支部が設けられ、会員もゆるやかであるが増加の傾向を見せ始めた。それと共に主はアメリカからの宣教師だけでなく、日本人のために日本人の宣教師を遣わされる



機会を与えて下さった。現在、地区代表をしている安芸宏兄弟や地域管理本部に務める今井一男兄弟、渡辺驩兄弟らが主の器として召され、日本人宣教師の先駆けとなって働いたのである。以来、幾人かの日本人宣教師が召され、1954年8月の宣教師大会には実に22名の参加を見るまでとなった。こうして「日本伝道部」は1955年に日本・韓国地域を含めた「北部極東伝道部」と改められ、一段の飛躍が期されるのであった。



▲当時の安井東京知事にモルモン経を渡す宣教師たち

▼名古屋支部の兄弟姉妹（1952年）



仙台支部のMIAにて（1953年）



三条支部の日曜学校の会員（1953年）

力強い歩みへと

(1956—1969)

発展を遂げる伝道部

1955年、それまでのロバート・ソン伝道部長に代わってポール・C・アンドラス長老が新しい伝道部長として召



当時のアンドラス伝道部長御家族

された。彼は伝道再開の1948年、宣教師として働いた実績を持つすぐれた指導者であった。すべての伝道部長がそうであるように彼も日本人をこよなく愛し、その日本人に対しての献身は伝道部の成長と進歩に大きく貢献した。1957年の1年間の統計記録からもその伝道部の発展の跡がはっきり読みとれる。この年だけのバプテスマは638人で、伝道部の歴史中最も多く、また支部も新設のものを加えて31カ所を数えるほどになった。会員総数は2,000人以上にのぼり、そのうち神権者は400人近くを数えた。そのため1958年には伝道部史上初めての神権定員会が組織された。またこの年には50人以上の会員が結婚している。これらの記録が示すように、1957年は教会員にとって大きな変化の年であった。

1909年に初めて出版された日本語訳モルモン経は、「できるだけ多くの人々に福音を知ってもらうために、わかりやすい日本語に翻訳し直したい」というクリソード伝道部長の意図のもとに1949年より改訳が進められていたが、8年近くを経て1957年5月30日、ついに出版の運びとなった。そ

れは佐藤龍猪兄弟をはじめとする多くの兄弟姉妹たちによる大事業であった。

また、このような教会の著しい動きと共に、聖徒たちは自分たちの教会堂を持ちたいという願望をつのらせていった。そして教会堂の必要性は日増しに強くなり、やがてその建築資金作りに力が注がれるようになった。1957年度中だけで1,200万円以上の建築資金が全国より寄せられた。それにより、数カ所の支部の土地が購入され、建築プログラムは着々と実現の方向へと進んでいった。

1958年も前年同様の発展を遂げている。聖徒たちは依然として建築プログラムを押し進めようと努力を重ねていた。

北部極東伝道本部の建物（1948年以来、30年間にわたって日本の伝道の拠点であった。1980年、東京神殿に替わる）



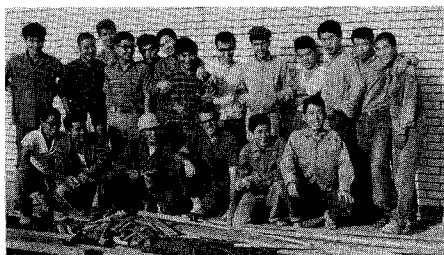
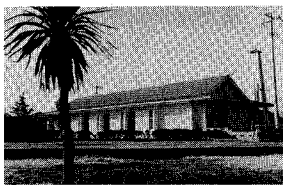
建築プログラムに着手

1962年、ドウェイン・N・アンダーセン伝道部長が着任すると、北部極東伝道部はさらに力強い歩みへと踏み出した。従来、各支部の支部長にはアメリカから遣わされていた宣教師が、伝道のかたわらその責任を果たしていたが、その頃から、日本人会員の手に委ねられるようになってきた。

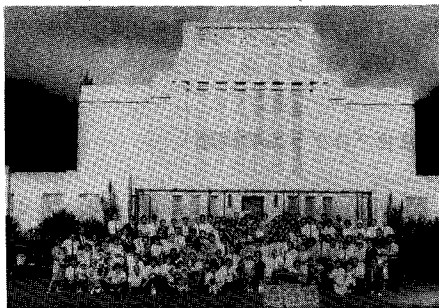
1962年9月30日、この日極東において歴史的とも言える教会堂建築プログラムが着手された。東京北支部においてである。以後、翌年には東京西、南、東、横浜、高崎と相次いで進められていった。またその建築のために、全国から信仰に燃える若い男性が建築宣教師として大勢召されていった。彼らは学業や職業を持っていたが、それらを投げ打って1年間、あるいは2年間純粹に奉仕の生活をしたのである。彼らは宿舎に入りながら、毎日力の限りを尽くして働いた。建築に関しては全くの素人の彼らではあったが、その働きには俗世的なものを捨て去った美しさと主のみ業に奉仕する者のみが持つ真実の信仰があった。またそれと共に忘れてはならないのは、彼らを助ける会員たちの奉仕活動である。ある会員は建築宣教師のために食事の世話や日用品の提供、さらには生活費の援助までも快く引き受けた。また、それぞれ時間を作っては建築宣教師と一緒に汗を流したりもした。こうした努力によって1964年春、東洋初の教会堂（東京北支部、現東京第2ワード部）が完成するのである。ちなみにこの年のバプテスマは2,000人を超すまでに驚異的な数字となった。そして次に日本の聖徒たちが目指す業は神殿参入の実現であった。

東京北支部▶

▼建築宣教師たち



日本の聖徒たちの信仰を通して



ハワイ神殿訪問者（1965年）

1965年7月、待望の日本人による最初の神殿参入が、ハワイ神殿訪問というかたちで実現した。全国から160余名の信仰篤き聖徒たちが参入したが、そこにはうろわしいドラマの数々が展開された。

日本の聖徒たちは訪問者の渡航費用を助け合うために、真珠のネクタイピンの販売やLPレコード『日本の聖徒らはうたう』の吹き込みなど、心温まる支援活動をくり広げた。神殿訪問計画を成功させようという、こうした日本の聖徒たちの熱心な働きは、見事にその花を開くことになる。

こうして神殿に参入することのできた兄弟姉妹の喜びは格別に大きかった。どうしても涙を禁じ得なかった神殿での儀式、滞在中、いたるところで受けた現地の人々の歓待、そしてかつて愛を分かち合った旧友たちとのなつかしい再会など。その経験した一つ一つが実に感動の連続であった。

日本における力強い歩みは今まであげた建築プログラムや神殿訪問計画においてだけでなく、M.I.A.プログラムなどにも見られた。1968年8月に東京で催されたM.I.A.ユースコンファレンスは、それを象徴する素晴らしい集いだった。北は北海道から南

は沖縄に至るまで全国各地からの1,200人以上もの若人が一堂に会し、スポーツ、演劇、音楽、ダンスなど盛り沢山のプログラムに価値ある時を過ごした。

教会プログラムの実施

会員は増加の一途をたどり、日本の教会は一層の発展を遂げてきた。そのような状況にあって会員を実務面から援助する教会プログラムの実施が必要となった。1968年3月、東京に翻訳事業部が設立されたのはそのためである。完全な福音を日本語でも学ぶことができるようにという目的のもとに作られたのである。それにより、教会出版物の日本語への翻訳、印刷、出版、そして配送という一貫した教会プログラムの実施が可能となった。

その後、1972年1月には教会教育プログラムがわが国に導入され、同年8月1日よ

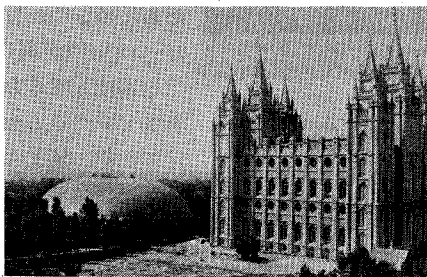
り鈴木正三兄弟を中心としたメンバーによって進められていった。やがて1981年4月には東京の渋谷にインスティテュートが開校されるまでに至っている。また、1977年5月には管理監督会アジア地域管理本部が設立されている。それは日本はもちろん、アジア地域で急速に発展するステークス部、伝道部を実務面で支援し、奉仕する機関として設置されたものである。ここには今、財務、建築、情報、資材管理などの諸部門があり、それぞれの機能を果たしている。この監督としては1981年6月日本人として初めて、北村正隆兄弟が任命された。管理本部は東京神殿と至近距離にあり、日本の聖徒たちを助ける大きな役割を担っている。また、1978年には東京神殿の活動と系図業務を円滑にするため、東京神殿系図サービスセンターが設置された。

その後、教会を広くマスコミに伝えるためアジアで最初の教会の広報部も設立されている。

飛躍的な発展へ (1970—1981)

1970年、飛躍的発展の幕開け

1970年3月15日、日本の聖徒たち待望の日本最初のステークス部（日本東京ステークス部）が誕生し、初代ステークス部長として田中健治現東京地区代表が召された。これは東洋において最初のステークス部であり、日本の教会史に輝く画期的な出来事であった。また、



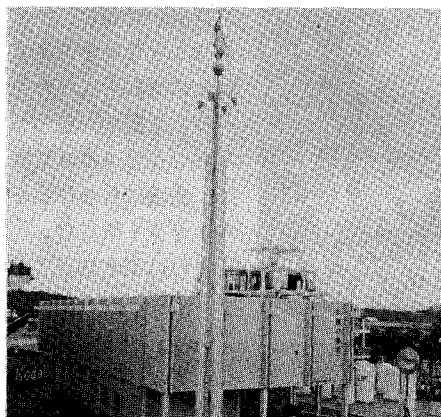
350余人の日本の聖徒たちが訪問したソルトレーク神殿

同時に日本人として初めての伝道部長（日本西部伝道部）に渡辺雅兄弟が召された。

さらに9月には、350名の聖徒たちによってソルトレーク神殿の訪問が実現した。

それは聖書の子言の成就を見る思いで、多くの指導者が口にしていたように「まさに奇しき業」であった。

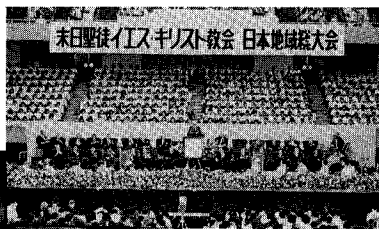
また、同年開催された大阪万国博には当教会も参加し、その展示



モルモンバビリオン

館(モルモンバビリオン)は見学者の目が大いに注がれるものとなった。1年近くにわたる会期中、700万人以上がバビリオンを訪れた。

これら一連の出来事を見る時、日本の上に神のみ手が置かれ、祝福されていることを感じずにはいられない。当時、主の教会は世界的にも急速に発展していた。しかし日本におけるほど著しい発展を遂げたところは他にあまり例を見ない。そのことは後にいくつにも分割、誕生を繰り返す伝道部やステーキ部の姿に実証されている。



▲日本地域大会
◀東京神殿建設の発表をするスペンサー・W・キンボール大管長

1972年には日本で2番目の大阪ステーキ部が誕生した。このような著しい教会組織の変化は日本の教会史上かつて見ることでできなかったことである。

1975年8月には希望と感動の日本地域大会が開催された。スペンサー・W・キンボール大管長をはじめ、教会幹部や指導者を通して数限りない祝福がもたらされた。そのひとつがキンボール大管長による東京神殿建設の発表である。あの時の情景は強烈な印象として人々の心の中に刻まれている。日本の聖徒たちにとっては忘れることのできないニュースであった。

教会幹部に初の日本人



菊地良彦長老
(七十人第一定員会会員)

1977年10月1日、菊地良彦長老が日本人として初めての教会幹部(七十人第一定員会会員)に召された。その10年ほど前、ヒュー・B・ブラウン副管長は阿倍野支部において、次のようなメッセージを日本の聖徒たちに残

している。

「……私の話に耳を傾けていらっしゃる皆さんの中の何人かは、……日本人の皆さん方のある人たちは教会の指導者になるに違いありません。私は今、自分の心の中にそれをひしひしと感じます。私はこの予言を主のみ名によっていたしたいと思います。」

教会幹部に初めて日本人が召されたことはブラウン副管長のこの予言が成就しつつあることを示すばかりでなく、日本人がいかに祝福されているかを表わすものである。

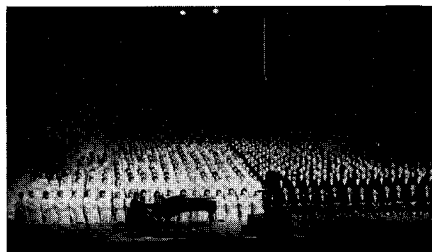
伝道部、ステーキ部の急増

シオンのステーキ部は、1970年の東京ステーキ部を皮切りに、1972年の大阪ステーキ部、1974年の横浜ステーキ部そして東京北ステーキ部というように続々と新設されてきている。

現在は、以上の他に、名古屋、札幌、福岡、神戸、高崎、仙台など全国に20のステーキ部が組織されている。伝道部も著しい成長を遂げ、現在では日本国内に9つの伝道部を有するまでに至っている。またワード部や支部は全国各地に300カ所以上設置されている。このように、福音は次第に日本の津々浦々にまで広められるようになってきた。

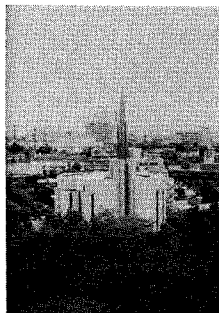
祝福された日本の地

このように発展を遂げる日本の聖徒たちに、主より数々の祝福がもたらされた。そのひとつは、1979年9月のモルモンタバナクル合唱団の来日公演である。彼らは日本の聖徒たちの心に多くの感動を呼び起こしてくれた。そして、その美しい歌声とエネルギー的な行動は、伝道の業にも一役買うことになったのである。



モルモンタバナクル合唱団

また、昨年、日本の聖徒たちは、かつてない至上の祝福に浴した。10月、待望の東



京神殿が完成し、キンボール大管長を迎えて献堂式が催されたのである。全国から参列した熱心な兄弟姉妹たちは、感涙にむせびながらホザナを叫んだ。

それに引き続いて10



東京神殿(上)と地域大会会場の日本武道館

月、11月には東京と大阪の地において地域大会が催された。この大会でもキンボール大管長をはじめ多くの教会指導者を通じて、主より霊的な糧を得た。ゴードン・B・ヒンクレイ長老はこの大会で次のように語り、日本の聖徒たちを励ましている。

「この国はまさに日出ずる国であります。そしてこの国では今、教会が出ずるように、著しい発展を遂げています。……この国は将来教会の驚くべき発展を遂げる国です。……兄弟姉妹の皆さん、私たちの前に横たわっている将来に目を向けながら、主が愛しておられるこの国にシオンを築こうではありませんか。」

こうして1901年に主のみ手が差し伸べられて以来80年。日本各地にはシオンが建てられ、その業は止まるところを知らない。


かつてヒーバー・J・グラント長老が抱いた、日本にも偉大なみ業は始まるという確かな夢は、現実となってここに大きく花開きつつあるのである。

維 新の熱気がまださめやらぬ1872年、岩倉具視、大久保利通、伊藤博文、木戸孝允ら明治政府の有力な指導者が、開国日本の近代化の方法を知ることを目として欧米諸国を歴訪した。これが岩倉使節団と呼ばれるものである。

2月4日、この使節団がソルトレーク・シティーを訪問した。入植後25年そこそこで砂漠に築き上げられたモルモンの一大帝国をその目で見るためである。事実岩倉は地元の新聞であるデイリー・ヘラルドの記者に、荒野を切り開いたモルモンの開拓者の経験が、同じような問題を多くかかえている新生日本にとって貴重なものとなるであろうと述べている。

一行は大雪のために結局はソルトレーク・シティーに2週間半滞在、2月22日に特別列車で東へ向かった。

アメリカの社会をじかに見るということに関して、ソルトレーク・シティーでの2週間半は実に有意義なものであったと思われる。彼らは鉱山や学校、病院、州議会、裁判所、連邦軍の駐留地、それに各種企業と、多くの場所を見学して回った。さらに、人々の生活に宗教がどれほどの影響力を有するものであるかを、つぶさに見る機会があった。使節団の多くが、滞在中の3回の日曜日に、ワード部やタバナクルでの集会に出席したのである。彼らは恐らく、末日聖徒の集会に



岩倉使節団 エピソード

出席した最初の日本人であろう。

一行は、ソルトレーク・シティーでの滞在に対して好印象を持ったようである。大久保、木戸双方の日記にそのことが表われている。木戸は新築されたタバナクルについて長い感想を記し、その大きさ、形、そして特に音響効果に深い感銘を受けたと述べている。またブリガム・ヤングとの会見についても触れ、144人の開拓者たちが身の回りの物を背負って1,500マイルの旅をするのを指揮した人物であると、いささか誇張した表現をしている。

また大久保は、木戸ほどではないにしても、多妻制度とブリガム・ヤングの17人の妻と20人の娘について書いている。

いずれにしても、双方共モルモンの指導者や社会に大変感銘を受けたことは確かで、迫害を受けて西部に移住しなければならなかったという境遇と多妻制度に触れてはいても、それらに対する消極的な意見はみじんも見られない。

大雪という自然の力によって、モルモンの町に予想外の長きにわたって滞在を余儀なくされた新生日本の指導者。そしてそこで直接触れることのできた真実の教会。それから30年後の日本への伝道の備えは、すでに始まっていたのである。
(ゲイリン・M・アブダイク『岩倉使節団』ブリガム・ヤング大学歴史学490でのリサーチペーパーより)

日本の伝道八十年の歴史

日本の教会略史	世の動き
1901 ●初めての宣教師、横浜に到着。日本の地にて伝道開始される	●オーストラリア連邦成立
1902 ●日本人初のバプテスマ	●日英同盟成立
1903 ●初めての一般集会所が開かれる	●(このころ第二次産業革命)
1904 ●モルモン経、日本語に翻訳開始	●日露戦争(～05)
1905 ●讃美歌、日本語に翻訳開始	●ポーツマス条約締結
1909 ●モルモン経日本語訳初版発行	●伊藤博文、ハルビンで暗殺
5 ●信仰箇条、850枚発行 ●日本語版讃美歌初版発行	●1914、第一次世界大戦(～18)
1920 ●デビッド・O・マッケイ、ヒュー・J・キャノン長老来日	●第一回国勢調査
1924 ●日本伝道部閉鎖	●1923、関東大震災
1948 ●日本伝道部再開 エドワード・L・クリソード伝道部長召される	●1941、太平洋戦争(～45)
1949 ●十二使徒マッシュ・カウリー長老来日	●日本、世界労連加入
1950 ●婦人会開かれる(名古屋支部)	●湯川秀樹博士にノーベル賞
1951 ●MIA歌集(32曲)翻訳	●日本安全保障条約の調印
1952 ●日本語モルモン経点訳される	●血のメーデー事件が起こる
1953 ●日本人宣教師召される	●テレビ放送開始
1954 ●十二使徒ハロルド・B・リー長老来日	●日本ビルマ平和条約締結
1955 ●沖縄、伝道の地として奉獻 ●日本伝道部が、北部極東伝道部に改められる	●第二次鳩山内閣成立
1956 ●ポール・C・アンドラス伝道部長着任 ●十二使徒補助ゴードン・B・シンクレイ長老来日 ●「聖徒の道」出版	●日ソ交渉妥結。国連加盟 ●第2次中東戦争
1957 ●新訳日本語版末日聖典発行	●日本、国連非常任理事国となる
1958 ●レクリエーション歌集翻訳完成 ●松本市、ソルトレーク・シティと姉妹都市締結	●特急こだま号の運転開始
1961 ●支部長会日本人の手に委ねられる	●ソ連が人間衛星の打ち上げ成功
1962 ●ドウェイン・N・アンダーセン伝道部長着任	●キューバ危機が起こる
1963 ●教会堂建築プログラム開始される ●MIA第1回全国大会開かれる	●核実験停止条約が結ばれる ●ケネディ大統領が暗殺される

日本の教会略史	世の動き
1964 ●東洋初の白亜の教会堂完成（東京西、北支部）	●東京オリンピック開催
1965 ●第1回ハワイ神殿訪問 ●アドニー・Y・小松伝道部長着任	●ベトナム戦争本格化 ●日韓条約調印
1967 ●ヒュー・B・ブラウン副管長来日	●ヨーロッパ共同体（EC）発足 ●第3次中東危機
1968 ●東京に翻訳事業部開設 ●日本初のユース・コンファレンス開催 ●伝道部が2つに分割（日本伝道部と日本沖縄伝道部） ●「聖徒の道」国際機関誌として出版 ●会員数1万人に達する ●初等協会正式に開始	●川端康成がノーベル文学賞を受賞 ●核拡散防止条約が結ばれる
1970 ●東京ステークス部組織（最初のステークス部） ●大阪での万国博覧会に参加、パビリオンに700万人訪れる ●350余人の聖徒によるソルトレーク神殿訪問 ●日本沖縄伝道部分割（日本西部伝道部と日本中央伝道部）	●日本万国博開催 ●日米安全保障条約自動延長
1971 ●東洋初の祝福師に渡部正雄兄弟召される	●ドル・ショック。円切上げ
1972 ●大阪ステークス部組織（2番目のステークス部）	●沖縄返還。ニクソン、中国訪問
1973 ●日本名古屋伝道部新設 ●日本人向訪問者センター、ハワイに開設	●ベトナムの米軍撤兵完了 ●中東戦争の影響で石油危機
1974 ●日本札幌伝道部、日本仙台伝道部、日本神戸伝道部新設 ●横浜ステークス部組織（3番目のステークス部）	●金脈問題で田中首相退陣、三木内閣成立
1975 ●アドニー・Y・小松長老、十二使徒評議員会補助に召される ●日本地域大会開催	●山陽新幹線、博多まで開通
1977 ●日本東京北ステークス部（4）と日本大阪北ステークス部（5）組織 ●菊地良彦長老、七十八第一定員会会員に召される ●管理監督会アジア地域管理本部設立	●鄧小平復活、華体制固まる ●王選手、本塁打世界新記録
1978 ●日本名古屋ステークス部（6）、日本札幌ステークス部（7）組織 ●日本東京伝道部が日本東京北伝道部と日本東京南伝道部に分割、さらに日本西部伝道部が日本福岡伝道部と日本岡山伝道部に分割（全部で8つの伝道部）	●成田空港開港 ●日中平和友好条約調印される
1979 ●日本福岡ステークス部組織（8） ●モルモン・タバナクル合唱団来日	●東京サミット開催 ●インドシナ難民問題深刻化
1980 ●日本神戸ステークス部（9）をはじめ、東京東（10）、札幌西（11）、高崎ステークス部（12）組織 ●東京神殿オープンハウス、献堂。東京、大阪地域大会開催 ●教会員5万人となる ●日本沖縄（13）、町田（14）、名古屋西（15）、仙台ステークス部（16）組織	●モスクワオリンピック開催
1981 ●東京にインスティテュートハウス開設 ●日本静岡（17）、高松（18）、東京南（19）、広島ステークス部（20）組織	●レーガン大統領就任 ●チャールズ皇太子御成婚

ヒーバー・J・グラント大管長と 北海道のビート産業

札幌ステークス部長

濁 沼 誠 二

北海道のビート（砂糖大根）産業と、グラント大管長が密接な関係にあると言ったら、多くの人々は首をかしげるかもしれない。しかし、モルモン教会の日本における伝道の歴史の陰にこうした事実があったことを、史料を通じて明らかにしたい。

グラント長老が日本に伝道部を開くように召された時、彼の言葉を借りると「10万ドルの債務があり7万ドルはすべてを整理して返済できるがとても伝道にはいけない」と考えた。しかしみたまのささやきがあり、「主があなたを祝福される不思議な方法があります。どうして伝道に出ようとしないのでですか」と勧告された。

「彼は昼食をとるために帰宅し、ひざまずきそして主に感謝を捧げた。なぜなら、この召しを成就できると主は予言と確信を彼に与えて下さったからである。彼が引き続きひざまずいている時、「ユタ砂糖会社」に関する靈感が与えられた。そして実にその産業から3万ドルの純益をあげることができたのである。」（スペンサー・J・パーマー *The Church Encounters Asia*, p.56）

グラント長老は、ビート農業に熟知し、それを工業化したユタ砂糖会社の経営者で

もあったのである。

明治の偉大な指導者のひとりに、新渡戸稲造がいる。彼は、東京英語学校（現在の東京外語大学）を経て札幌農学校（現在の北海道大学）に入学した。同級生の内村鑑三らと共にキリスト教に入信し、卒業後アメリカとドイツに留学、1891（明治24）年、フィラデルフィアでクウェーカー教徒のメリー・エルキントンと結婚し、同年帰国して札幌農学校教授となっている。

さて北海道の農業に関して「新北海道史」（第6巻通説5）は、

『甜菜（ビート大根）のみが稲とならんで着実な作付面積の増加（昭和23年1万2600ヘクタール、30年1万6800ヘクタール、40年5万5200ヘクタール、48年6万1800ヘクタール）と反収の増大（10ヘクタール当り、30年2234キロ、40年3040キロ、48年4780キロ）をみせたことは注目すべきことであった。甜菜は北海道がほとんど唯一の生産適地であり、戦前から北方農業の模範作物として手厚い奨励と保護を受けてきた」と述べている。このようなビート農業の定

着は、第一次大戦以来しきりに唱導された「地力造成集約農法」の成果であるが、この成果はビートという基本的でしかも具体的な作物を得て初めて目の目を見たものであった。この農法の中味は、輪作酪農とビート糖業の保護奨励による「北歐式農牧混合集約農法」と言われるものである。そして、これを指導したのが他でもない新渡戸稲造であり、彼の北海道の殖産政策の根幹にビートがあったといっても過言ではない。

ソルトレーク・シティーの教会本部歴史部の図書館で索引番号〔CR4185/6/BX-1〕を引くと、「*Journal of the Japan Mission*」（日本伝道部日誌）を目にすることができる。その1903（明治36）年6月23日に次のような記述がある。

Mr. Kinzo Hirai called on us today. Also Captain Kakeki, Pres. Grant and his wife called on Mr. Nitobe, but he was not home and his wife was not well. So they did not see either. In the evening Pres. Grant called again and met Dr. Nitobe and had a long conversation on the beet sugar industry of Utah. He is interested in the agriculture of Japan and is a very influential man.

これを読むと、グラント夫妻は、新渡戸稲造を訪問したが、彼は留守であり奥さん

も健康がすぐれなかったために会うことができず、夕刻再度訪問して、長時間にわたってユタ州のビート糖産業について語り合ったという。この日誌の書き手が「彼は日本の農業に関心を持ち、非常に影響力のある人だ」と書いているのは、知らぬはなんとかでユーモラスでさえある。

また7月18日(土)の項には、次のように書いてある。

Mr. and Mrs. Nitobe called in the evening. We found them agreeable people and were glad to meet them. Mr. Nitobe is the author of a little book on Japan, entitled "Bushido", a copy of which was presented to Pres. Grant some months ago by Captain Kakeki.

この日は新渡戸夫妻が伝道本部を訪ねている。宣教師は新渡戸夫妻に好感を寄せ、会ったことをとても喜んでいる。そして、新渡戸博士が「武士道」の著者であることがわかる。

こうした交流を通して考えられることはいろいろある。ビート農業についてのみ言えば、ふたりの間で、ビートのアメリカ種とか、栽培技術、あるいは企業化することについて話がはずんだに違いない。そしてその道のベテランであったグラント長老より新渡戸稲造がどんなことを学んだのか、また「武士道」よりグラント長老が何を学び取ったのか。いずれにしても、モルモン教会伝道史に残る両巨人の心の交流であった。

◇新渡戸稲造（1862-1933）◇

岩手県盛岡市の生まれ。明治、大正を通じての教育家。札幌農学校、米ジョンズ・ホプキンス大学などを卒業、京大教授、一高初代校長などを歴任、国際連盟事務局次長をつとめ、国際平和の実現に尽くした。

歴史は語る

教会幹部の初の来日

—ヒュー・J・キャノン長老の言葉から—

ヒュー・J・グラントによる伝道部開

設以来初めて来日した教会幹部は、当時十二使徒であったデビッド・O・マッケイであった。今からちょうど60年前、1921年のことである。当時の様子を、マッケイ長老に随行したヒュー・J・キャノンの言

葉から眺めてみることにしよう。

「マッケイ大管長が来日した時の伝道部長はジョセフ・H・ステンプソンで、すでに11年もの長きにわたって日本に滞在し、一番上の子供は日英両語を流ちょうに話した。



デビッド・O・マッケイ長老(子供を抱いた婦人の右後方)と日本の聖徒たち
奈良富士哉兄弟(中央の学生服姿)も見える。

伝道本部は純日本風の邸宅であったが実に快適であった。私たちはまず入浴を勧められた。日本流の斬新な入浴方法については聞いて知っていたので、私たちは喜んで受け入れた。火は風呂桶の一端に設けられた鉄の箱の中で燃やす。桶は径と深さが大体同じで約4フィート（1.2メートル）ある。入浴する人は、まずきれいに体を洗わなければならない。完全に洗い終えたら、桶の端をよじ上って中に入る。そのお湯ときたら、これが人間として耐え得る限界と思われるほどの熱さだ。こうして、同じ湯に家族全員が入るが、湯は大して汚れない。

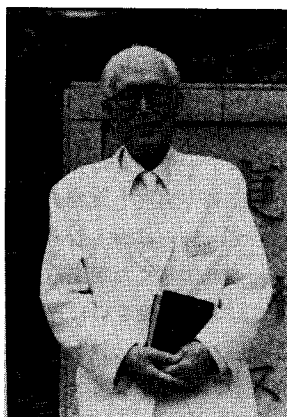
……この国で伝道が始まって20年ということだが、教会員はたった125人である。東京、大阪、甲府で開かれた特別大会で、宣教師たちはマッケイ長老の話を熱心に聞いていたが、み業の進展の遅さに、彼らの心ももうひとつ晴れなかったに違いない。

マッケイ大管長は北海道にある支部を訪ねたいと言った。そこで私たちは、ステンプソン伝道部長家族と共に出発した。本州と北海道を結ぶのは船だが、その船は海のまっただ中で碇をおろし、乗客はタグボートに乗り移らなければならない。ところがその日は大時化で、ボートが船に衝突しそうになるかと思えば、陸上競技の幅跳びの選手でも届かないと思うほど船から離れてしまうような状態であった。……マッケイ長老はこうした様子を見て、無理に上陸するのは危険であると判断、私たちも失

意のうちにその決定を受け入れないわけにはいかなかった。

……日光見物の帰りの汽車の中に、着物姿の美しい少女が乗っていた。くるぶしまでのストッキングに木のサンダルをはいている。若い男性と老婦人が一緒だ。しばらくして、彼らはおもむろに弁当を広げ始めた。油紙に包んだ箸を取り出すと、見事な手さばきで食物を口に運ぶ。指で直接食べ物に触れることは決してないのだ。私たち好奇心の強いアメリカ人は、驚嘆の思いで目の前に繰り広げられるショーに見入ったものである。少しして、私たちはステンプソン姉妹手製のサンドウィッチがあるのを思い出した。しかし、アメリカ人のサンドウィッチの食べ方はどうだろう。手でパンをわしづかみにし、まるでクマのようにかみついて食べるではないか。向かいにすわっているその少女は、今度は見られる側から見る側に変わった。そして我々を見て吹き出したのをじっとこらえている様子である。遂に彼女は窓外に流れる景色へと目を移した。何のことはない。笑いを隠すためである。……」（スペンサー・J・パーマー、*The Church Encounters Asia*, pp. 61—64参照）

この記述からも当時の伝道がいかに困難なものであったかが推察できるが、同時に、当時使徒であったマッケイ長老をはじめ、指導者たちの日本の民に対する温かい愛が直接伝わってくるようである。



モルモン経を手にした佐藤兄弟
(東京神殿入口にて)

聖典の日本語訳に及ぶ



「教義と聖約」「高価なる真珠」を翻訳し、「モルモン経」の改訳に心血を注がれた佐藤龍猪兄弟。回復された福音を日本人に宣べ伝えるためになみなみならぬ信仰を燃やした佐藤兄弟の働きは日本の教会発展に大いに貢献するものである。

「皆さんは私がすべてを翻訳したと思いますようですが、それは間違いです。私はそのまとめ役をしたにすぎません」と謙遜に語る。その淡々と語られる口調には物腰の柔らかさがにじみ出ている。

佐藤兄弟は戦後間もない1946年、郷里の愛知県鳴海町で、駐留米軍人をもてなしたのが縁で福音を知ることとなり、奥様とお子さんと共にバプテスマを受けた。これは伝道再開後の初めてのバプテスマであり、極東における教会の新時代を告げるものであった。

「できるだけ多くの人々が福音を知るために旧訳のモルモン経を分かりやすい日本語にしたい」というクリソード伝道部長の希望は、やがて英語に精通する佐藤兄弟に白羽の矢が立つことになった。

アルマ・O・テイラー長老が最初の翻訳を完成して以来40年。そのモルモン経は日本の社会情勢の大きな変化や、教育制度の変革などに伴ってその文体を変えることを余儀なくされた。

佐藤兄弟はモルモン経の改訳に際しての気持ちや次のように語っている。

「旧訳のモルモン経が不完全なために新訳が企図されたわけではありません。むしろその訳は立派であって、神の助けを通して

すぐれた学者らによってなされたことを本当に知らされます。ですから、この新訳の業にあたっては、私は神様の助けを乞い願いました。」

ちなみに佐藤兄弟は1949年8月、クリソード伝道部長より主任翻訳者として召され、その後、マース伝道部長より按手札を受けている。佐藤兄弟の語るモルモン経改訳の経緯を簡単にまとめると次のようになる。

佐藤兄弟が主任翻訳者に召されて間もなく、アンドラス長老、高木富五郎兄弟、奈良富士哉兄弟、児玉琴枝姉妹、藤原光江姉妹、長尾栄姉妹および佐藤兄弟の7人からなる翻訳委員会がまず組織され、その大事業のスタートが切られた。

一応、翻訳はできるだけ旧訳の文脈にそって進められたという。文章の主体を口語とし、その言葉一つ一つに高木富五郎兄弟、および白石源吉兄弟の貴重なアドバイスを受けた。高木兄弟はユタ州で新聞記者を務めたほどの英語に秀でていた人である。

翻訳上、いろいろむずかしい問題も生じている。イザヤ書の聖句などのように難解な訳には、ジョセフ・フィールディング・スミス長老やハロルド・B・リー長老が来日した際、教えを受けたという。

仕事はほとんど南青山の自宅と伝道本部の一室で進められていった。翻訳はもちろんのこと、その後の校正にも力が注がれた。「御存じのように、関連聖句を示す頭注の照合や校正には大変神経を使いました。何人もの兄弟がそのために多大の労をとって下さいました。」その言葉に、陰で働いた人

人の苦勞がひしひしと感じられる。

こうして8年の月日が流れ、原稿も整ったところで、1956年6月に、大管長会の許可を得て特別翻訳委員会（アンドラス伝道部長、鬼木、ランドバーク両副伝道部長、高木兄弟そして佐藤兄弟からなる）が組織された。そこで主に原稿の照合や最終的な改訂が行なわれた。

やがて1956年10月には大管長会より翻訳出版の許可があり、最終的な段階に入った。そして翌年の5月30日、遂に出版刊行の運びとなったのである。それは8年も要した日本の教会史上かつて見られなかった大事業である。

最後に佐藤兄弟は、当時をなつかしむようにこう語ってくれた。

「この業は、ジョセフ・フィールディング・スミス、ハロルド・B・リー両長老、代々の伝道部長と副伝道部長、さらには多くの宣教師、会員、そして印刷製本等に協力された三省堂の方々など、たくさんの人々の助けによって達成されたものです。本当に感謝しています。」

佐藤兄弟は終始、落ち着いた調子で語る。そこには人の気持ちを包む言い知れぬ心の暖かさがある。今年82歳になられると聞くが、その表情は生き生きとしている。偉大な事業を成し遂げたその姿に明治人の気骨を見る思いがした。きっと長い間培ってきた信仰がそのようにさせるのであろう。

現在、佐藤兄弟は東京神殿において神殿宣教師として奉仕しておられるが、今後もその御活躍を心からお祈りしたい。

回想記

家庭の主婦として忙しい身でありながらも、音楽を愛するあまり、讃美歌の翻訳に情熱を燃やしたひとりの信仰あふれる姉妹の体験。



讃美歌にまつわる思い出



恵比寿ワード部
柳田 聡子

1956年3月、当時は北部極東伝道部の西中央地方部大会が珍しく名古屋で開かれ、アンドラス伝道部長とランドバーク副伝道部長が来名されました。土曜日はMIA大会、日曜日が一般大会でした。そしておふたりは私たちの家にお泊まりになりました。その夜おふたりは赤い表紙の *Recreational Songs* という本を持って来られて「あなたは『MIA歌集』(1951年発行)や『子等は歌う』(1953年発行)を今までに翻訳しましたね。でもあのMIAの歌は少なくて今では足りません。この本を翻訳しませんか」とおっしゃいました。私は「讃美歌の中で今の人々にはわかりにくいものが沢山ありますから、あれを訳し直した方がいいと思いますが」と申しました。実際「情をな燃えさせそ」という歌など反対の意味にとっていた人を知っていましたので。すると伝道部長は「それも考えています。でも今はこちらをして欲しいのです。」頼もしい大木のような彼の目がじっと私を見て、それに付き添うように優しいランドバーク長老がニコニコして黙って返事を促していらっしゃいました。結局その時に始まり、シャム

ウェイ長老と御相談して選り出版できたのが赤い同じ表紙の「レクリエーション歌集」でした。それは1957年発行となり、MIAで盛んに使用されました。神様は何でもステップを踏んで徐々に私たちを導いていらっしゃる事が今はよくわかります。

1959年6月、それまで私の両親は浦和でふたりきりの生活をしていましたが、名古屋の私たちの家に共に暮らすことに決まり、引越して来ました。その時父が紺色の英語の讃美歌集を持って来て、「アンドラス伝道部長が、名古屋へ行くのならこれを柳田姉妹のところに持って行って、ふたりで新しい讃美歌を作って下さいと言われたよ」と申しました。私はいよいよその番がまわって来たと思い、正直なところとても大変だとは思いましたが、同時に大好きな仕事でしたので勇気が湧いてうれしく思いました。父は「わしは編集をするから訳の方はやってくれ」と申します。もともと古い讃美歌集は父が20歳の頃早稲田大学在学中にほとんど訳したもので、メロディーを長老が口ずさんでそれに合わせて訳したとのことでした。私は机を居間の窓際に出して、そこ

に頂いた英語の本を抜け、原稿用紙を出し、鉛筆と辞書を置き、いつでもすぐ書ける状態にしておきました。6人家族の主婦である私は家事が双肩にありましたから、洗濯機が回っている間、お掃除のすぐ後、お料理の煮える間等、いつも家事の合間に机に向かい、すぐその環境に入れるように机の上は出したままにしていました。古い日本語訳を直す方法では原文から離れる恐れがあるので、全部原文から訳し直しましたが、時々昔の訳を参考にしました。現在日本の本に入っていて英語の本にない歌があるのはなぜかと時々宣教師の方から質問されますが、アメリカでも昔は「デゼレトサンダー・スクール」という本を使っていたので、その中の歌が古い日本の讃美歌に入っていて、よく歌われていたのでその原本を頂きそれを入れたわけです。彼らにはその話をし、「あなたの御両親やおじいさんおばさんは知っていらっしゃるでしょう」と答えます。213番の「見すてたもうな」は現在のアンダーセン神殿長夫人の父上が非常な迫害と苦難に会っていた時作詞作曲されたものだと言った。昨年神殿ができてから伺い、古い歌を省かないでよかったと思いました。讃美歌は人を慰め、励まし、疲れを癒し、証を注いでくれる霊感の歌だと思います。名古屋で最初のMIAの小さい歌集を出す時、今は東京神殿宣教師の金綱長老が原文に忠実にと忠告して下さったことを思い出し、その精神を守りました。発想の展開が耳馴れない時でも作詞者の思いを受けつぐ気持ちで敢えてそのままをとりました。ただ曲の切れ目と言葉の切れ目を考えないと、民謡ステンカラー・ジンでいつも妙に思うのが「……今湧くそしり」を歌うと「今は糞しり」と聞えるのです。そんなことから歌を訳す時はまず曲を覚えて、歌いながら言葉

を入れるようにしました。とても難しいのと、16番や178番等のように比較的やり易いものがありました。旧訳の讃美歌は大正4年12月発行され、教会が中断されていたもののその後昭和35年まで末日聖徒に親しまれていたもので新しく変わることは人々の中には抵抗もあったと思います。私はみたまの助けが必要でいつもお祈りをしていましたので、あの時の1年ばかりは本当に充実した気持ちでした。翌年の8月に父と上京し伝道本部（今の東京神殿のある所）のお庭の別棟の部屋に二晩ほど泊めて頂き、編集や印刷について伝道部長や印刷屋さんとお話し合いました。今アンドラス長老は遠く、父は亡くなり、私にとっては懐しい思い出となっています。

讃美歌の楽譜の左上に曲の速さが「♩=78」のような数字で示されているものは紺色の英語の本に現在あるもので、それがないのはデゼレトの方にあって紺の本になくなっていくものと判別することができます。両方の本にあるものは紺色の本の方を採りました。こうして1960年12月に印刷ができ上がって出版されることになったのですが、印刷屋さんは皮表紙の本を3冊作って下さいました。アンドラス伝道部長と父と私に名入りで。父の分は川越ワード部の図書館に差上げました。アンドラス長老は1冊お持ちでしょう。私は自分の懐しい思い出と共に保存しています。

讃美歌は霊の歌であり、人々の慰め、励ましとなって愛されることが心からの願いであります。今後も私の好きな歌のことで奉仕する機会がありましたらさせて頂きたいと思っています。拙い稿を書かせて頂き、この機会を深く感謝して、聖徒の皆様への霊的、物的な発展を主のみ名によりお祈りさせて頂きます。アーメン。



歴代の伝道部長

1901年に開設された日本の伝道部は、教会の発展とともに大きくなり、80年を迎えた現在、それは全国に9カ所を数えるに至っています。また、各伝道部を管理した伝道部長は現在の伝道部長も含め、これまで43人にのぼっています。

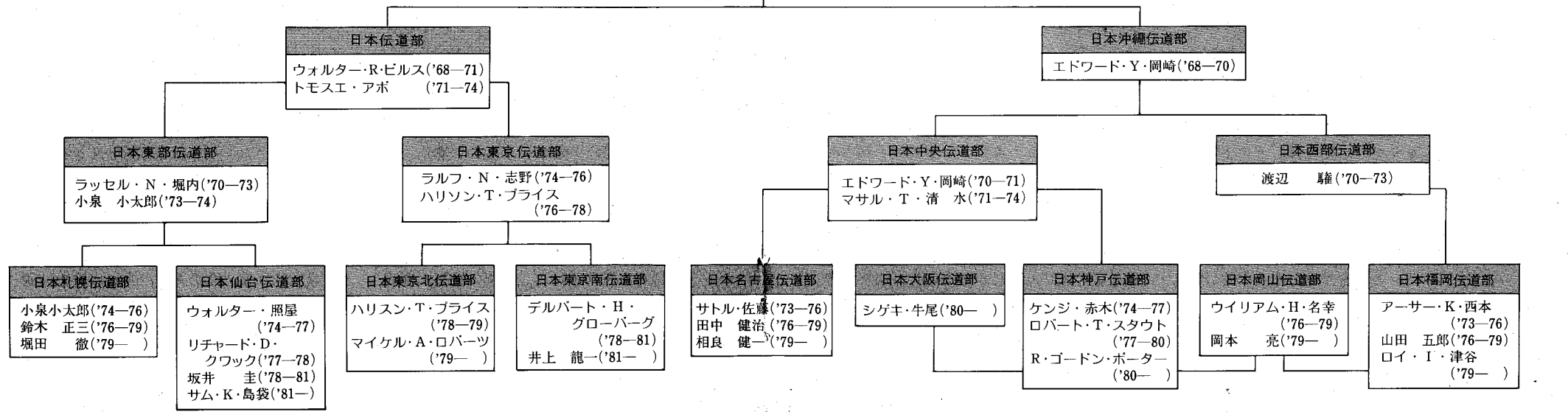
・私たちは今、43人の方々とその御家族の働きに心から感謝申し上げます。

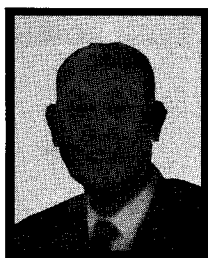


日本伝道部
ヒーバー・J・グラント (1901—03)
ホーレス・S・エンサイン (1903—05)
アルマ・O・テイラー (1905—10)
エルバート・D・トーマス (1910—12)
H・グラント・アイビンス (1912—15)
ジョセフ・H・ステンブソン (1915—21)
ロイド・O・アイビー (1921—23)
ヒルトン・A・ロバートソン (1923—24)
エドワード・L・クリソード (1948—49)
ヴァイナル・G・マース (1949—52)
ヒルトン・A・ロバートソン (1952—55)

北部極東伝道部
ボール・C・アンドラス (1955—62)
ドウェイン・N・アンダーセン (1962—65)
アドニー・Y・小松 (1965—68)

》現在の伝道部長《





主のみ手となつて仕えた 故山中健次兄弟を偲んで

東京神殿長

ドウェイン・N・アンダーセン

1981年3月10日、私は山中健次兄弟の葬儀に臨むために、平塚に向けて車を走らせていました。山中兄弟は教会に加入する以前、政界、実業界、教育界において豊かな経験を持っていた人でした。武蔵野市では2度にわたって市長候補にのびりましたし、早稲田大学の総長に推されたこともありました。また1970年の万国博覧会では、委員として活躍しました。

その彼がバプテスマを受けたのは、1963年6月11日のことです。以来教会は、彼の純粋な信仰心と各界への影響力により多大の恩恵を受けてきました。そのひとつが、これから述べるハワイ神殿訪問の実現です。

当時私は、日本と沖縄を含む北部極東伝道部の伝道部長の任にありました。その頃最も頭を悩ませていた問題は、どのようにして指導者を強めていったらいいかということでした。日本の教会がこれから大きな発展を遂げるためには、指導者が今よりももっと強い信仰を持つ必要があると感じたのです。いろいろ考えた末に出た結論は、指導者に家族を連れて神殿を訪問してもらうことでした。そこで早速山中兄弟に、15家族を神殿に派遣するとしてどれだけの費用がかかるか調べてもらいました。ところがこれがとても支払い切れる額ではなく、何かいい方法はと考えておりましたら、ちょうどその時訪日していたソルトトレック・

シティーのビーハイブ旅行団の団長が、飛行機をチャーターしてはどうかと提案してくれました。しかしそのためには160人余りの人を募らなければなりません。早速ハワイ神殿訪問の案内が各地の神権指導者のもとに届けられました。向こう18カ月間にわたって経済的にも霊的にも準備をすることのできる人のリストを作成して返送して欲しいという内容のものでした。ところがどうでしょう。忠実な会員たちの反応には本当に目を見張るものがありました。飛行機の座席を満たして余りある人数が集まったのです。

この神殿訪問の準備のために尽くして下さった山中兄弟の働きには頭の下がるものがあります。1年半の準備期間中、彼は数数の調整のために東京と平塚の間を精力的に往復し、しかもこうした働きに対して何ら経済的な報酬を受けることはありませんでした。予期したように、この計画が進展し始めると、サタンはあらゆる方面に障害物を置きました。しかしそれも、山中兄弟の持つ大きな影響力のもとに一つ一つ消えていきました。私は彼から、この神のみ業を推し進める上でどれほどの励ましを受けたことでしょうか。

教会が資金獲得に乗り出すのは前例のないことで、先行きを懸念する声があったことも事実です。しかし山中兄弟は志を貫き

通す人でした。まずタイピンやイヤリング、ペンダントとして加工できる真珠を入手しました。そしてそれを加工して販売、利益をすべて神殿訪問資金としました。また知人を通してあるオーケストラに伴奏を依頼し、小さな末日聖徒の聖歌隊のコーラスをステレオ盤に録音しました。こうしてこの真珠とレコードのプロジェクトは、第1回の神殿訪問のみならず、第2回の訪問の資金にも充当できるほどのものでした。

山中兄弟の献身は資金獲得だけにとどまりません。第1回の訪問の出発もあと2ヵ月という頃、航空会社との間に複雑な問題が発生しました。詳しく述べることは致しませんが、とにかく計画を初めから練り直さなければならぬほどの問題でした。しかし、その航空会社の副社長と友人関係にあった山中兄弟は、航空会社に大幅な譲歩

をさせることに成功、遂に飛行機をチャーターすることができました。

山中兄弟のこうした数々の働きと助けにより、大人136名、子供29名の一行は太平洋を渡り、夢にまで見た白亜の神の宮で永遠の絆を結んだのです。そればかりではありません。参加した日本中の指導者たちは、ハワイのワード部やステーク部のプログラムから教会の本来の姿を目のあたりにすることができました。そしてこのことが、後の日本における教会の飛躍的な発展の下地を作っていたのです

確かに山中兄弟は、神のみ手にある道具として自らの力を余すところなく捧げた人でした。日本の聖徒たちが彼から受けた恩恵には計り知れないものがあります。この偉大な真理のチャンピオンの御冥福を心から祈るものです。



鈴木なみ姉妹

◎女性として最初の改宗者◎

若い頃、宣教師宅で炊事や洗濯などの世話をしていたという鈴木なみ姉妹。彼女はグラント長老の帰国後、1905年1月20日にバプテスマを受けている。23歳の時であった。その後、結婚して6人の子供をもうけたが、うちふたりを戦争や病気で失い、家も大戦中の空襲で焼失するなど、大きな悲しみを味わっている。そのような境遇にもかかわらず、彼女は遠い

道のりにあった教会に忠実に集っていた。

晩年は病床に伏す毎日だった。だが姉妹宅に聖餐のパンを届けた渡部正雄兄弟の話によると、彼女はいつもはっきりとした声で、一番好きな讃美歌「恐れず来たれ聖徒」（古い歌詞は「苦を恐るな聖徒」）と一緒に歌ってくれたという。またグラント長老の話に触れると、決まって次の言葉が口に出た。「長老は日本語を一生懸命覚えようとしておられましたが、そのうち、お国に帰ってしまわれました。」

彼女は1974年5月26日、93歳で亡くなった。生前、彼女が大事にしていた財布は今も横浜ワード部に保管されている。彼女の手による最後の献金もそこから捧げられた。

伝道80周年の今年は鈴木なみ姉妹の生誕100年にあたる。

日本の教会発展のために大いに貢献した歴代の伝道部長。私たちにとっては忘れることのできない人々である。なかにはすでに故人となった人もいるが半数以上の人々はアメリカや日本で元気に信仰生活を送っている。その中の幾人かに今回、祝福のメッセージや近況などを伝えてもらった。

日本伝道80周年 に寄せて —かつての伝道部長より—



クリソード長老

1947年の秋に、私は日本で伝道を再開するようにとの召しを受けました。もちろん、私の妻も私と一緒にいくようにとの召しを受けました。

そして翌1948年2月、私は横浜に着き、そこで何人かの軍人の聖徒たちに会いました。その後間もなく、伝道の再開を忍耐強く待っていた年配の教会員たちにも会いました。

2カ月後の4月に、伝道本部兼伝道部長の居宅となる家と敷地を購入し、5月に改築工事を開始しました。それが現在東京神殿のそばに立っている、東京都港区の敷地でした。

1949年の夏に伝道部を訪れた、十二使徒定員会会員のマシュー・カウリ長老が日本の将来の神殿（複数）について述べたのは、その伝道本部の献堂の祈りにおいてでした。そのため、本部の建物を壊して神殿が建てられると聞いた時には、実に複雑な気持ちに駆られました。というのも、その建物を購入し改築するのは多大の努力が必要でしたし、また今後長い間教会のために使われるであろうと考え、かつ希望していたからです。しかし心の片隅では、東洋初の神殿の建つ敷地を購入するのに役立てたということで、感謝の念を抱いております。

伝道の再開にはみたまの導きと支えがあって、私たちの努力が報われたのです。また、クリソード姉妹や、最初の5人の宣教師たちの献身も見逃すことはできません。さらに、日本の会員たちも大きな助けの手を差し伸べてくれました。

言うまでもなく、日本の国の方々に福音のメッセージをお伝えするという機会は、私にとって大きな喜びであり、価値ある経験でした。

しかし当初は、日本の方々をそれ程まで深く愛するようになろうとは思いませんでした。日本人が選ばれた民であり、イエス・キリストの教会で力強い存在となり、主の義しい目的の達成に寄与するようになろうとも思い及びませんでした。ところが、1948年に日本で伝道活動が再開されるや、目覚ましい発展が起こったのです。それと共に、日本の兄弟姉妹に対する私の愛と賛辞の気持ちは大きくふくらんできました。

昨年の10月に東京神殿の献堂式が催されましたが、私にとっては実に喜ばしい、霊的な体験でした。というのも、1948年にマシュー・カウリ長老が発した予言的な約束が成就したからです。私自身、妻や子供たちの協力と支持を得、一緒に働いてくれた素晴らしい宣教師たちの無私の努力によって、この予言の成就に多少なりとも貢献できたのではないかと思います。

皆様に私たち夫婦の愛の気持ちをお伝えしたいと思います。3人の子供たちは全員結婚し、現在13人の孫と、4人の曾孫がいます。孫の内ふたりは、日本で伝道しました。私たちは皆、祝福された生活を送っており、教会の責任を忠実に果たしています。



マース長老（右は令嬢の
ベギー・エライアソン姉妹。
東京神殿にて）



アンドラス長老御夫妻

私は今から35年前、米軍のパイロットとして日本に行き、駐留軍人として1年間滞りました。それから3年後、今度は戦後再開された日本伝道部の最初の5人の宣教師のひとりとして日本に戻り、その時は3年間伝道をしました。そしてそれから7年後、妻と私はふたりの男の子を連れてまた日本を訪れました。伝道部長として北部極東伝道部を管理するためです。その時の滞在は7年になりました。私たちの下の3人の子供は東京生まれです。その中で、長男のボーンは日本札幌伝道部、次男のチャールズは日本名古屋伝道部、三男のジェイは日本福岡伝道部でそれぞれ伝道し、アンドラス家族の日本での伝道年数は合わせて24年にもなりました。

私たちの伝道は以下の12項目にまとめることができると思います。

1. 伝道が大幅に進展した。
2. 日本語の標準聖典を発行した。
3. 韓国と沖縄に宣教師が派遣された。
4. 東京、大阪、ソウルにステーク部の基礎が据えられた。
5. 教会堂用地の取得が行なわれた。
6. 支部の新設・閉鎖が行なわれた。
7. 地方部や支部に地元の指導者が召されるようになった。
8. メルケゼデク神権者が大幅に増えた。
9. 日本人の専任宣教師が多く召された。
10. 「聖徒の道」などの出版を始めた。
11. 日本と韓国において教会が宗教法人としての規定をすべて充足した。
12. 米軍人末日聖徒の組織を作った。

私のもとで働いた宣教師の中で、10人が伝道部長に、そしてひとり（菊地良彦長老）が教会幹部に召されています。

私たちは1965年に帰国しましたが、私はその後ハワイのチャーチ・カレッジとブリガム・ヤング大学で、カウンセラーと留学生アドバイザーの職を歴任しました。教会の責任の方は、高等評議員や神殿のスーパバイザー（プロボ）、ブリガム・ヤング大学学生ステーク部の祝福師などを行なう特権を得、1980年5月14日、スペンサー・W・キンボール大管長により東京神殿の神殿長に按手任命されました。

妻は1970年によく大学を卒業、ハイスクールとジュニアカレッジで英語・英文学を教えました。また『霊的な雰囲気のもとで行なう家庭での性教育』と題する彼女の講演は好評を博しています。神殿長夫人としての按手任命はマリオン・G・ロムニー副管長から受けました。

私たちの家族の中で特別に紹介しなければならないのは、長女のトゥルーディーでしょう。彼女は大学で体育を専攻し、ハイスクールとジュニアカレッジでスポーツコーチを務めるひとりの兄弟と結婚しましたが、今から1年前、大きな悪性腫瘍が胸にできているのが見つかりました。そしてちょうどその時、お腹には双子を宿していました。医師は堕胎をしきりに勧めたのですが娘は承知せず、キンボール大管長の主治医であるネルソン博士の執刀で腫瘍の摘出手術をしてもらうことになりました。2週間の内に2回大手術を行ないましたが、お腹の中の子供は奇跡的に助かり、それから4カ月半後、かわいい瓜ふたつの女の子を自然出産することができました。彼女は今、毎日3マイルのジョギングをし、町中の人々を驚かせています。主は確かに生きておられます。



アンダーセン長老御夫妻



ビルス長老御夫妻(中央は御子息の「ロンちゃん」)

私が日本での伝道に召された時は、伝道部はまだひとつでした。それが現在では多くの伝道部になり、ステーキ部も数多く設立され、美しい神殿さえあります。確かに日本の地は祝福されています。

しかしこれは、教会の発展に貢献した聖徒たちすべての働きがあってこそ得られたものでした。

私たちビルス家族には、22人の良き孫がいます。男女それぞれ半数です。「ロンちゃん」は、ペンシルベニア・ハリスバーグ伝道部で伝道を終えたばかりです。

ロリは4歳の長男を頭とする3人の息子の母親です。ロリの夫は日本で伝道した帰還宣教師(デュアン・ティベッツ)です。ラスとシェリーには2人の息子がおり、ラスはテキサス州ダラスで不動産業に携わっています。

ウォルターとカレンには5人の子供、ドンとラレンには4人の娘、ケネスとクリスティーンにはふたりの息子とふたりの娘、ランディーとシャロンには息子と娘がひとりずつ、そしてスコットとウェンディーには愛らしいふたりの娘がそれぞれいます。

私は今、ソルトレーク神殿で結び固め執行者として奉仕しており、妻は扶助協会で教え、またオルガンの伴奏をしています。長男のウォルターも私と同じ召しを受けて働いています。

私たちは日本での素晴らしい経験を決して忘れません。皆さん方立派な教会員の方々と交流も決して忘れません。

岡崎姉妹と私は、これまでと同じように主から豊かな祝福をいただいております。健康に恵まれ、教会でも職業でも祝福されています。私たち夫婦は今年の6月に、32回目の結婚記念日を祝いました。また、ソルトレーク神殿で結び固めを受けて30年過ぎました。

岡崎姉妹は今、ホリー・ヒルズ小学校で校長を務めています。日本での伝道後、教職の傍ら、修士号を取得しました。

私は現在、合衆国政府のデンバー地区教育部でコンサルタントをしています。

私たちは教会では、ステーキ部スペシャルインタレストのために責任者として働いています。ステーキ部内の各ワード部のスペシャルインタレスト・プログラムを強化するのに多忙です。

私はまた、地区代表の下で家庭と家族組織担当の地区スペシャリストを務めています。

長男のケネスは27歳で独身、現在ユタ大学で法律を学んでいます。

ロバートは26歳、ブリガム・ヤング大学で修士号を取得し、現在、IBMでシステムエンジニアとして働いています。

ロバートは学校を卒業し、間もなく結婚の予定です。

息子たちは、ケネスがブラジルのサンパウロ、ロバートが日本名古屋伝道部で働き、立派な息子たちです。私たち夫婦は、彼らのことで大きな喜びを感じています。



岡崎長老御家族



堀内長老御夫妻

全世界の人口の半数以上を占めるアジアは、福音のメッセージを待っています。その中で、日本の聖徒たちは大きな役割を果たすことができます。アジアにおける伝道活動を推し進めるに必要な自由と経済的な基盤があるのは、日本の国だけです。

そのためには力強い会員を増やし、よく訓練された献身的な指導者を育て、強い支部、ワード部、ステーク部を待つことです。もちろん、その根底には堅固な家庭がなければなりません。

私たちはこのような考え方の下に、多くの事柄を行ない、活動してきました。

奉仕する機会を得たことは確かに心を満たされる素晴らしい経験でした。しかしそれ以上に、私たちが伝道地で知り合った人々がその後も働き続け、また共に奉仕した 300 名近い宣教師たちが進歩成長を遂げている姿に、この上ない喜びを覚えるものであります。

伝道後、私たち夫婦は共にブリガム・ヤング大学で教鞭を執っています。妻は日本語、文学、書道を教え、私は地理学部とアジア研究プログラムで教えており、地理学部長を務めています。

教会では、妻は扶助協会での責任、私は宣教師訓練センターで支部長を務めてきました。(先日、この責任を解かれました)

魚釣りの好きな私は、相変わらず釣りを楽しんでいます。

「光陰矢の如し」とか申しますが、日本中央伝道部での祝福された 3 年間の伝道を終えて早 7 年が経ちました。「聖徒の道」を通して皆様にお便りできますことを心より感謝しております。

帰国後は主の豊かな祝福を受けてソルトレーク・シティーに住み、また総大会ごとに日本からの神権指導者の方々をお迎えする素晴らしい機会に恵まれております。愛する指導者や兄弟姉妹の皆様が続けて主の王国建設に活発に参加され働いておられる様子を見聞し非常にうれしく思っております。

私たち家族は皆教会で色々な機会に恵まれ、成長の道を楽しみ歩んでまいりました。4 人の息子たちはそれぞれ祭司、教師となり、8 歳の四男は長兄からバプテスマを受けるために準備しています。姉妹は子供の養育にある傍ら、1974 年以来扶助協会中央管理会の一員として、忙しく奉仕しています。私は帰国以来、大祭司グループリーダー、高等評議員、監督の召しを果たし、現在は YM 会長として青少年プログラムに参加しております。

聖句にある如く、福音は全日本がまた全世界がイエス・キリストはこの世の救い主であると知るまで、止まることなく述べ伝えられるのです。日本の皆さん、共に主の王国を日本中に築き上げるために続けて頑張ろうではありませんか。



清水長老御家族

小泉長老御家族



愛する兄弟姉妹の皆様、アローハ

日本の聖徒たちが素晴らしい進歩成長をしていますことを、心から喜んでいます。時の経つのは早いもので、私たちが日本札幌伝道部から帰ってもう5年になります。

キャロル・ミツコは12歳、小学校6年を終えました。学校が大好きで、水泳や自転車乗り、音楽や演劇を楽しんでいます。

エバン・メグムは13歳です。自転車乗りやレスリング、水泳に興味を持ち、チェロのレッスンを受け始めて1年以上です。

妻のグレース・キヨコ姉妹は、ステーク補助協会の訪問教師メッセージ指導者を務め、ワード部スカウティング委員会の委員でもあります。

私は1978年12月以来、ステーク部長を務めて現在に至っております。

私たちは日本をなつかしく思っています。3年間の生活を送ったことで、故郷のように感じています。

1973年に伝道部長として召された時、予言者から、家族を見つけて教えるようにと言われました。当時は日本のことをそれ程知りませんでしたから、予言者の言われる通りに、宣教師たちに指示を出しました。その結果、最初は少なかったにもかかわらず、結局は48の家族を福音の下に導くことができたのです。そして、幾つもの支部に分けることができました。

このような予言者の勧告が、現在の札幌におけるふたつのステーク部を生み出したのです。忠実な宣教師たちの働きに感謝しています。

日本の伝道開始80周年をお祝い申し上げます。
現在日本では伝道活動が非常に成功していると聞いています。実に喜ばしいことだと思います。思いますが、東北地方の教会員や愛する宣教師たちとの3年間の思い出には感慨深いものがあります。そのような素晴らしい経験を得させて下さった主に感謝しています。

伝道を終えて4年になりますが、これまでに教会の史跡を方々訪れ、また野外劇も数々見てきました。その間、ふたり目の孫の誕生で娘を手伝うため、7カ月間ワシントンD. C.で暮らしました。

退職してから何年にもなる昨今、私たちは気ままな日々を楽しんでおります。私はテニスや熱帯植物の栽培に外忙で、妻は陶器造りを新しい趣味にして張り切っています。

私は今、大祭司クラスと福音の教義クラスで教えており、旧約聖書を学び直しています。実に恵まれた生活で、聖典から感銘深い事柄を教えられるので感謝しています。

妻はワード部ホームメーカー教師と、ステーク部食事スペシャリストを兼務しています。台所での食物の試作が多く、宣教師にそれを食べてもらうことを楽しみとしています。

人生で喜びと成功を勝ち取るには、完全に福音に従った生活を送ることです。日本の皆さんがいつも教会内でふさわしい奉仕をし、終わりまで耐え忍ぶことができますように。



伊和長老御夫妻



佐藤長老御夫妻

日本名古屋伝道部が開設されたことは、私たちにとって特権であり祝福であると同時に、大きなチャレンジでした。というのは、私自身、伝道部の管理運営方法をまったく知らなかったからです。しかし前任者の方々が親切に助けて下さいました。また、日本の聖徒たちは協力的で誠実であって、才能も豊かで、よく支持して下さいました。

伝道部が発展するにつれて、日本の聖徒たちを愛する私たちの気持ちも深まり、もっと長く一緒に居たいと思うようになりました。

伝道部での経験は素晴らしいものでした。教会員が増した一方で、幸いにも、聖徒たちのために教会堂建設用地を何か所か購入することができました。関係者の方々に感謝しています。

当時の私の心からの願いは、聖徒たちが主のみたまにあずかり、平安と安息を得ることのできる、心地良い教会堂を建てることでした。そして、幾つかの支部でそれを達成し、教会堂を建てることができたのでした。このことは、私にとって忘れがたい大切な思い出となっています。

私たちの伝道は学習の時期、改宗の時期、自ら福音の中で成長し、他の人々が主のみ業の中で進歩成長するのを見守る洗練の過程でした。

私は天父が実在し、私たちを見守っていて下さることを知っています。そして、イエス・キリストは世の救い主であることも知っています。

私たちは土曜日に召しを受け、3日後の水曜日には福岡に向けて東京の地を後にしました。私たちの教会での召しは、いつもこのような調子です。

伝道部長としての任務に就いて最初に心に強く感じたのは、家族を改宗しなければならぬということでした。若い人たちは、改宗しても学校を終えたと大都市に転出してしまうからです。私たちのこの家族中心の伝道によって、経験の豊かな、社会的にも大きな影響力を持った方々がバプテスマをお受けになりました。

ある方は県の職員で、レッスンの後数日で改宗されました。それまで20年もの間、真理を探し求めていた人でした。

プロテスタント教会の役員の方もいらっしゃいました。この方は初めからこの教会が真理であることをわかっておいででしたが、教会に入るのをためらっておられました。しかしある家庭集会で強きみたまの導きと証を得、すぐにバプテスマを受けられました。この方は今、地方部長をしておられます。

私たちは、伝道期間中に神の力の現われを数多く目にしました。あるふたりの宣教師は日豊本線の列車脱線転覆事故に巻き込まれましたが、彼らの前の席にすわっていた人をはじめ多くの犠牲者が出た中で、彼らふたりは奇跡的に守られました。

私たちは、こうした数々の経験を通して主の暖かいみたまに触れる機会がありましたことを心から感謝致しております。



渡辺長老御夫妻

私たち夫婦はいつも、阪神地方にイエス・キリストの福音を広めた思い出と経験について語り合います。

帰米してから、私たちの生活や家族にいろいろな出来事が起こりました。札幌での伝道を終えた長男のケビンが、ハワイ神殿で結婚しました。そして今、キベッテという名の1歳の娘がいます。ケビンはハワイ大学を卒業し、今年就職です。

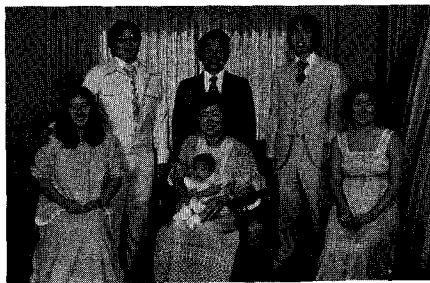
長女のノリーンは今、ハワイ大学で日本語を専攻しています。来年卒業したら、伝道に出る予定です。

末の息子のジェイは大学生となり、伝道に出る準備をしています。

私の妻のジーンは、ステーク部初等協会第二副会長として熱心に働いています。また、カブスカウトも責任のひとつとして楽しくやっています。

私はステーク部高等評議員を務め、伝道活動を担当しています。

私たちは、日本神戸伝道部で奉仕できたことを感謝しています。福音を受け入れた人々の生活に多くの祝福が注がれたのを目にし、さらに彼らが王国の発展に貢献する姿を見てきました。イエス・キリストの福音に対する証を強くした立派な方々と交われてうれしく思っております。すべての方々がイエス・キリストの福音を恥とせず、山の上のあかりとなるよう願っています。皆様に、主の格別な祝福がございますように。



赤木長老御家族（中央はお孫さん）



プライス長老御家族

私はこれまでに20年間、美しい日本で暮らしました。その間、2度、日本で伝道の業に携わりました。そのため、日本の聖徒たちに特に親しみを感じています。

第二次世界大戦後の1947年9月に、私は日本で伝道する戦後初の宣教師として召しを受けました。1924年以降、日本に宣教師は送られていなかったのです。そしてパスポートとビザの交付を待っている間に、さらに4人の長老たちが召されました。こうして1948年6月に、私たちはそろって横浜港に到着したのです。

私たちが伝道を開始した頃、伝道前の訓練などありませんでしたし、レッスンプランも、チラシもありません。そのため、日本語にはとても苦労しました。それでも、現在指導者となっている立派な方々を、聖霊の導きによって、福音の下に招くことができました。

その後、1976年4月に日本東京伝道部を管理する召しを受け、それまで勤めていた合衆国政府の仕事を辞めました。その3年間の伝道を1979年に終え、今、私たち夫婦はたびたび神殿へ行っています。またふたりとも、日曜学校の教師をしています。

私たちにとって、年に2度の、かつての宣教師とのリユニオンは大きな楽しみです。

私たち夫婦は毎日、少なくとも3キロ走ります。豆腐もよく食べます。そして今、私はアジアでの経験談を執筆中です。

いつも日本の聖徒たちのためにお祈りしています。

私たちが家族として、日の出ずる美しい国で福音伝道の業に携われたことは、実に素晴らしい機会であり、特権でした。そのことに対する感謝の気持ちは、言葉に表わせません。

私たちは今でも家庭の夕べで霊的な経験を分かち合い、天父へ感謝を述べています。

長男のアルドン・カタユキは現在、5歳の娘と2歳の息子の父親で、11月にもうひとり子供を授かる予定です。アルドンは、ハワイの管理監督会地域管理本部で、地域財務部長を務めています。

次男のディー・カタヨシは1972年から1974年まで北海道で伝道し、今、プロボのブリガム・ヤング大学で学んでいます。まだ独身です。

3男のケビン・カタミツは1975年から1977年まで日本仙台伝道部で働き、1980年にブリガム・ヤング大学ハワイ校を卒業し、結婚してユタ州オーレムに住んでいます。

4男のケイス・カタシは1976年から1978年まで日本福岡伝道部で伝道し、現在、ブリガム・ヤング大学ハワイ校に通っています。まだ独り身です。

5男のランディー・カタマツは1977年から1979年に日本東京南伝道部で働き、兄のケイスと同じ学校に通っています。

私たちは伝道中のことを考えてみると、皆さん日本の聖徒たちから得た霊的な経験は非常に大きなものがあります。そのことに対しては感謝の言葉もありません。

主の豊かな祝福が、常に皆様に注がれますように。



名幸長老御家族



鈴木長老御家族

与えられた聖なる召しを心から感謝致しております。私たちの伝道について考えてみますと、以下の5点に集約されるのではないかと思います。

1. 「汝ら主の器をもてるものは潔くあれ。」伝道は主の業であり、みたまの導きが必要です。私たちは全宣教師に、あらゆる罪から身を清めてみたまを受けるにふさわしくなれるように言いました。
2. 祈り。アルマ8:10を読んでいた時、私は祈りが必要であるとの靈感を受けました。そこで伝道部全体で、毎朝6時半に祈りを捧げました。こ

のことから全北海道に主の強いみたまが注がれたことは言うまでもありません。

3. 家庭集会はみたまの導きをよく受けた状態で行なうようにし、初めての集会から戒めのレッスンを行なうようにしました。その結果、2回目の集会を約束した家族の半数以上がバプテスマを受けました。

4. 会員との協力。これは教会員から紹介を受ける上で、また新会員の定着率を高める上で欠くことのできないものです。

5. 私たちは、バプテスマを受けた人が実際に自分の生活を変えていくようにチャレンジしました。その結果、教会員でなかった伴侶を模範を通して改宗にまで導く人が続々と出てくるようになりました。

最後に、私たちは共に一生懸命働いて下さった445名の宣教師の方々に心から感謝致します。主が生きておられることを心から証致します。



《特別企画》
伝道経験者による座談会

『伝道に捧げたわが青春の1ページ』を語る

青春時代の伝道の日々——それは体験者にとっては生涯忘れ得ぬ喜びの記録である。今、その体験を持つ6人の兄弟姉妹に当時のなつかしい思い出の数々を大いに語ってもらった。

司 会 本日はお集まりいただきましてありがとうございます。日本における伝道80周年を記念して、ここに座談会を開くことになったわけですが、きょうは伝道の経験をお持ちの皆さんに、かつての素晴らしい体験をきたんなく語り合っていただこうと思っています。

皆さんの中で最も古い経験をお持ちのクリステンセン兄弟をトップバッターに、伝道に召された時期と任地についてお伺いしましょう。

クリステンセン 1957年の3月から1959年

の10月ごろまででした。最初が高崎で、それから柳井、そして新しい支部を開くため西宮に行きました。その他、東京の池袋から新潟まであちこち回りました。北海道へも行きましたので日本中をだいたい回った感じになります。

石 坂 私は1966年12月から1968年12月までです。もっともそれ以前に建築宣教師をしていましたので、私には2回目の伝道ということになりますか。最初は東京の中央支部でした。

天 野 私もその時代で1967年から68年の間でした。最初は東京で、それから名古屋、大阪、また東京というようにだいたい4カ所で伝道しました。

神 田 私は天野姉妹より少し遅い時期です。ちょうど姉妹宣教師の任期が1年半から2年変わった時でした。初め、1年半のつもりで召されたのが途中で2年になりました……。とにかく私は転任がけっこうありました。初めに天野姉妹と同僚になりました。その後、仙台や札幌というように北の地を回りました。

クリステンセン 転任というのは楽しいで

出 席 者

- 天野郁子・旧姓安達 (川越ワード部)
石坂晃一 (恵比寿ワード部)
神田亜美・旧姓伊藤 (東京第6ワード部)
ネッド・L・クリステンセン(東京第1支部)
鳥越 香・旧姓村杉 (東京第5ワード部)
増井重之 (東京第6ワード部)

五十音順、敬称略

司 会 「聖徒の道」編集部

すけど、とても大変なんですよ。私の場合、高崎から柳井まで行くのに30時間もかかりました。二等の寝台車でした。そう、まるで棺の中にいるみたいでした。(笑)狭い上段のベッドでしたから、足を折り曲げるのが大変でしたよ(笑)

司 会 転任もいろいろと苦労しますね。伝道部がひとつしかなかった当時の日本の教会の実状がよくわかるような気がします。
神 田 私が伝道に召された時も伝道部はひとつしかありませんでした。途中でそれがふたつに分かれ、伝道部長がふたりになりました。私はそのひとつ日本伝道部に行くことになりました。

石 坂 ひとつしかなかった伝道部というのは北部極東伝道部のことですね。なつかしい名前です。日本人の男性宣教師は2年間、外人の場合は2年半の任期でした。その当時は言語訓練センターのようなものがありませんので、外人の宣教師はまったくのなけなしの日本語で日本の地に立ったわけで……皆、必死だったと思いますよ。私も転任はよくしました。福島から雪の新潟、それから熊本といった具合に……。

増 井 (まわりを見ながら) 私はこの中で一番若輩のようですね……。私が伝道したのは、1970年から72年にかけてです。日本伝道部に召されましたから、神田姉妹の後輩になりますか。そこで関東甲信越、東海地方と、地方だけを回りました。(笑)沼津、諏訪、いわき、新潟、松本、三条、長岡などを巡回しまして最後に足利で命が果てたわけですよ。(笑)

鳥 越 私は、1977年の4月13日から1978年の10月14日までです。神戸伝道部に召されました。最初が大阪で、豊中、姫路、明石、神戸と回りました。この中では私が一番遅く伝道を終えたようですね。改宗しましたのは14年前で、ずいぶん古いのですが、

その時の私の宣教師が非常に立派な方で、今でもよく覚えています。私が伝道に出ようと思ったのも、その宣教師のようになりたいと思ったからなんです。

伝道にかりたてられた心

司 会 宣教師の良い模範が鳥越姉妹によって伝道にでるひとつの動機となったわけですね。伝道の動機が出たところで他の方方にもそれについてお聞きしてみましょう。

石 坂 私、さっきも言いましたが、建築宣教師にでていまして、それが終わろうとしていた時、「伝道に出ようかな」ってある兄弟に話したんです。すると「もし本当に出るのだったらスポンサーになってあげましょう」ということで……。その時はもう、99%「じゃ、出ましょう」と言うことに。

(笑)なにしろ、建築宣教師でしたのでお金は全然ないわけで、だれかの助けがなければ出られなかったんです。

増 井 そうですね。私の場合、大学を中退しまして3年間働きました。仕事の関係で新宿に事務所を出したりしたものですから、手持ちがありませんでした。そんな時に、召しが来たんです。でもとにかく今すぐ出ないとチャンスは無いと思いまして……。それで当時のビルス伝道部長を通じてオレゴンの大祭司定員会のグループの方々にスポンサーになっていただきまして、やっと伝道に出ることができました。本当に今でもその方々に感謝しています。

石 坂 伝道のチャンスがあったら絶対に逃がしたくないと思いました。自分たちの同胞に伝道したいといつも感じておりましたから。

神 田 私、バプテスマを受けたばかりの頃、いろいろな人を見ましたけれども宣教師が一番輝いているんですね。自分も人々に福音を宣べ伝えてそんな宣教師のように

なりたいたあとに内心思っていました。

司 会 いろいろ動機があると思いますが、神田姉妹の場合はすぐ決心ができましたか。

神 田 私の場合、バプテスマを猛反対の中で受けましたので、伝道に出るなんて考えてもみませんでした。でもある時、ふっと「伝道に出たい」と心に感じたんです。それから夢中で突っ走ったという感じです。でも、両親の許可を得るまでかなり時間がかかりました。ほんとに大変でした。

天 野 皆さんは苦勞されたんですね。私は身内の兄弟が皆、教会員でしたので……。そういう意味では恵まれていました。それにフルタイムに出る前に地方部宣教師をしていましたのでほとんど抵抗なく伝道に出られました。

増 井 私の場合、動機はと聞かれても非常に難しいんですけど、いつのまにか出たいという気持ちになって、お祈りするたびに「出なさい、出なさい」って心に訴えるんですね。だからあれはもう出ざるを得なかったわけですね。(笑)

鳥 越 私も増井兄弟と似ているんです。教会に集うようになってから伝道は自分に与えられた使命だ、なんて気持ちがしてくるんですね。いつかは出なくちゃ思うようになっていました。

クリステンセン 素晴らしい経験ですね。私の場合、日本語の経験が全然ありませんから、3年間、どうしようかと思いました。私の友人のお父さんは、召しをもらう前に「どこへ召されてもいいですけども、日本にだけは行かないように」(笑)と言いました。それから召しの手紙を受け取ると「北部極東伝道部」だったので……。 (笑)でも、いい時代でしたよ。1ドルがまだ360円の時でした。1ヵ月1万8千円で生活できましたよ。

石 坂 時代の差を感じますね。その頃は

今とてんで違いますよ。まかないをして下さる人がいたんですよ。4人か5人の宣教師を。

クリステンセン 毎日、お手伝いさんに靴をみがいてもらって、食事もおいしかったですよ。もちろん麦は必ず食べましたけど。(笑)でも私は時々、御飯を食べました。砂糖をかけて……(笑)

司 会 まあ、食事については、特に外人宣教師にはいろいろなエピソードがありそうですね。御飯にバターや牛乳とかカレーライスにマヨネーズをかけるとか……(笑)



増 井 そんなこともありましたね。ほんとに楽しい思い出です。日本人には、食べ物苦勞はありませんが、別の面での不安や心配がありました。私は伝道前、「伝道に出

てもいいですけど、帰って来たら不安です。どうなっているか分からないので」と言ったことがありました。その時、ちょうど東京西支部の支部長をなさっていて、私のホームティーチングの先輩同僚だった菊地長老(日本・韓国地域代表役員)が「そんな増井兄弟、出ない方がいいよ。そんなこと心配するんだったら出ない方がいいよ」って言われたんです。それがグサリと胸に突き刺さりまして、本当に神様にすべてをゆだねて伝道に出ようと決心できたんです。

伝道の準備にあたって

司 会 やはり、多くの苦勞や不安というものはそれぞれあるものですね。でもそれをのり越えて伝道の決心をする時にこそ、素晴らしい経験と祝福が待っているわけですね。では次に皆さんに伝道に出るために準備されたことについてお聞きしてみたいと思います。

鳥越 そうですね。私は伝道に出た時が34歳でしたが……。だから体力的に若い宣教師について行けるかどうか、それだけが心配でした。体力をつけるために、少しでも多く歩くことにしました。早朝、勤務先の近くの皇居の周りを歩いたこともあります。

石坂 私はどちらかと言うと、財政面での問題ですね。小松長老に相談しまして「少しでも働くのは良いかもしれない」とアドバイスされ、約半年、働きました。いくらスポンサーを見つけて下さると言っても少しは自分で貯めたいと思いました。これは後々、残る問題ですからね。自分たちの孫に「おじいちゃんも貯めたんだからおまえたちも何としてでも伝道資金を作れ」というようなことが言えるわけです。自分でできる限りのことをやって、それから助けを受けるのなら、それはそれで良いと思いました。もちろん霊的準備だけは、自分自身でやらなければ、どうしようありません。これは当然のことですからね。

増井 霊的準備として、私は福音の知識を体系的に身につけようと思って、その当時発行されていた教会の本を全部読破しました。でも、後で気がついたんですけど、非常に深い知識というものは伝道にはあまり必要なかったんです。福音の原則や悔い改めを宣べ伝えるのが宣教師の任務ですからね。

神田 私の問題は親の説得でした。とにかくバプテスマの時でさえ猛反対でしたので、どうしたものかといういろいろ考えました。まず断食をしましてお祈りをして神様に助けを願わなくては、自分ではどうしようもないと思いました。とにかく私の信仰生活の中であれほど熱心に祈ったことはないというくらい懸命に祈りました。真剣そのものでした。もう、しつこいくらいに祈りま

したよ。



天野 そうですか。私は神田姉妹とは反対に、ほとんど苦勞がなくて…すぐに出ることができました。本当に恵まれていたと思います。皆様のお話を伺っていますと恥ず

かしくなるほどです。伝道に出る機会があったことを神様に心から感謝しています。

司会 伝道に出るにあたっては、いろいろな備え方があると思いますが、大切なのはどのような状況にあってもまず伝道に出るという決心をすることでしょうか。天野姉妹のように恵まれた環境にいらっしゃるからこそ、自らを試しの中に置かれる決心をされたと言うのも立派なことだと思います。

神田 そうですね。それぞれの場にあってそれぞれの試しと備えがあると思います。私は、とにかく家族の中で、自分が良くなったと思われるように、変わったということを知ってもらえるように、どんなことにも忍耐し、気を遣って生活しました。そんなこんなで、半ばあきらめの状態になっていた最後の頃に、両親もわかってくれて許可してくれました。あの時の喜びはもう言葉で言い表わすことができません。私にとって一番の試しであり備えになりました。

司会 なるほど参考になるお話ですね。ところで学生の時、監督より伝道のチャレンジを受けたクリステンセン兄弟の伝道の備えについてもお聞きしたいですね。

クリステンセン 私は監督から伝道の話があった時から非常に真面目になりました。ちょうど大学の試験中だったんですが、よく考えて「じゃあモルモン経を初めから終わりまで読んだことがないから読もう」というわけで、試験中に私はモルモン経を全

部読みました。おかげで試験はそれまでの中で一番よくできたと思いますよ。だから私は考えました。「もしも私が勤勉に教会のことをやるならほかのこともみんな大丈夫!」と。その時から試験の心配はしないで、伝道に出る3月頃までよく準備しました。その間にアルバイトもしましたし……。

印象に残る数々の思い出

司 会 では少し話題を変えまして、伝道中に最も印象に残ったことやうれしかったことなどを紹介していただきましょうか。

鳥 越 明石で、登校拒否の高校生にレッスンをした時のことです。私たち宣教師はその御両親と一緒にあって共に悩んだり苦しんだりしながら改宗へと導いたんです。とても大変でしたけど、バプテスマの日は一番感激しました。もうひとつ。50歳位の男の方にレッスンをしたんですけど、お酒もタバコも大好きという状態で、片時も離せないんですね。そんな方がやがて悔い改めをしてバプテスマを受けました。今では立派な神権指導者となっていますので、本当にうれしいです。

天 野 その喜びは私もよくわかります。最初、まったく耳をかきなかった人が、回を重ねるたびに謙遜になって来て、お祈りをするようになって変わって行くんですね。実際に、最後にバプテスマ会で証を述べる姿を見る時の喜びは、宣教師ならではと思います。

石 坂 まさにそうですね。非常にたくさんのことが思い出されます。走馬灯のように脳裏に浮かんで来て。あれも言いたい、これも言いたいと、出て来ますねえ。(笑)

鳥 越 あっ、そうだ!もうひとつうれしかったこと。(笑)実は私、それまで自転車にまったく乗れなかったんです。34歳まで乗れなかったのが乗れるようになったんで

す。伝道中の一番の収穫です。(笑)

クリステンセン 私にも大きな収穫がありましたよ。日本語が話せるようになったこと。(笑)高崎市に行った時、私は日本語がまったくできませんでした。伝道前も、今のように言語訓練センターがありませんでしたから、聖餐会で初めて日本語で話せた時はうれしかったですね。

司 会 クリステンセン兄弟は、今アメリカ大使館にお勤めですが、伝道で得た日本語は今のお仕事にも大いに役立っていることでしょね。

クリステンセン そうですね。やはり日本語を知ったことは、私にとって良い経験です。



神 田 伝道中って、いろいろなことがありますね。私、伝道が終わって10年もたって、実際に人々を愛すると言うことはどんなことなのか、謙遜になるにはどうしなくて

はいけないとかが言葉だけじゃなくて、体で理解できたように思います。伝道に出る前、聖典をただの言葉として受けとめていましたが、毎日24時間、ずっと神様に仕える生活を通して、聖典に書いてある言葉が実践できたという確信が持てました。

クリステンセン どの地に行っても、そこで知り合った人々との私の個人的関係性を出すと一番うれしいです。特に日本にまた戻って来てその人々と会う機会があって活発に教会で頑張っている姿を見ると非常にうれしいですね。

神 田 そうなんです。私がレッスンをし、改宗した5人の方々はみんな伝道に出られたんです。今では結婚されて子供さんもいたり、活発に責任を果たしている姿を見ると、自分自身が啓蒙されますね。

天 野 その反対にとっても悲しいことは、宣教師として求道者がひとりもいなくて、自分たちだけで聖餐会に出席すること。そんな時は本当につらいです。

増 井 私も、忘れられないことをひとつ。いわき市でバプテスマ会を開いた時のことです。その当時、太平洋岸の海でバプテスマをするんですけど、どうしても日程の関係で台風が去った翌日に行なわれたんです。3人の長老たちが防波堤の上で見守る中で、ひとりの長老に伴われて求道者の方が海の中に入ってバプテスマを受けました。その時、防波堤ぞいに、すごく高い波がビュッと走って来て……。見ていた3人の長老たちも、アッというまにバプテスマを受けちゃったんです。(笑)

クリステンセン 私が西宮支部を開いた時、同僚の宣教師はカナダからやって来ました。彼は、私よりも伝道経験が少なかったんですけれども、私の先輩宣教師になりました。

でも、同僚は全然、日本語を話せませんでした。ひとつのレッスンもできませんでした。私も、1課と2課のレッスンは良くできましたけど、3課からは日本語が難しかったです。でも5人の求道者がレッスンを受け始めて、1課、2課、3課というようにレッスンが進んで行きました。それから4課に入りました。求道者はだれもレッスンを止めません。だから、私、大変でしたよ。(笑)毎週、ひとつずつレッスンを覚えなければなりませんでした。でも、本当にいい経験でしたよ。大変でしたけど(笑)

石 坂 東北地方でも著名なお坊さんだったらしい人の話なんです。我々がいろいろ話しまして、最後にそのお坊さんが言われた言葉。「ああ、うちにもあなたたちのような若い人たちが一生懸命、教えを宣べ伝えてくれたらどんなに助かるかわかりませ

ん。いいですねえ。おたくの教会は」と言われました。なにかこう胸に残る言葉でしたね。

鳥 越 いろいろ経験しましたが、月日がたってふりかえてみた時にそれらが現実の生活に役立っていることを強く感じますね。(感慨深げに)

天 野 いろいろ試練もありますけど、楽しい思い出や、祝福もたくさんあります。

増 井 祝福と言えば、私は伝道が終わった直後にいただきました。大学へ戻ろうと思ひまして学長に直接かけ合いに行きました。5年もブランクがありましたけど、断食して行ったんです。うちの大学は中退する時、2年分の学費を払わないと籍は除かれると言われていたんです。でも学長は「じやいいよ、また来なさい」と言ってくれて、これは良かったと思っていましたら、そばから事務総長が校則を見せて「当大学では2年以上来ない人は再入学できないという項目があります。」と学長に耳打ちしているんです。私は「あ、もうダメか」と思った時、学長が「ああ、これね、今度変更しましょう」って(笑)。それで助かり大学に戻れました。

伝道を通して得たもの

司 会 話題が尽きないようですが、今度は、伝道によって皆さんが自分自身の人生で得たものについて聞かせていただきますようか。



鳥 越 私は、伝道に出る前、いろいろ思い悩むことがありました。でも伝道に出てみて、それらがまったく取り越し苦労であったことがわかりました。一生懸命、神様のことを行なっていたら何も心配することは

ないという証を得ました。

クリステンセン 本当にそうです。私も伝道を通して学んだ大切なことは、もし私たちが神様の戒めを守ろうと決心するなら、また教会指導者の言葉に従うなら、すべてうまくいくということでした。自分のことは心配しないで他の人のために一生懸命やってあげれば自分の生活も良くなると思います。自分のことばかり心配している人は神様のよき助け手、道具となることはできないということを知りました。

天 野 私もそう思います。神様の娘として一生懸命仕えてくるなら、ふさわしい特性や徳を身につけられると思います。例えば、愛、慈悲、謙遜とかいろいろありますね。特に私は、伝道前、人付き合いが悪くて……。それがだれとでも仲よくなれて、協調性が身についたのは伝道のお陰と思っています。

神 田 私は家族の反対を押し切って一方的にバプテスマを受けてしまったという両親に対するうしろめたさがどうしてもありました。でも、本当に正しければいつかはわかってもらえるという気持ちと二通りの思いが心の中でいつも揺れ動いていたんですが、伝道が終わった時、本当に自分が信じた道を進んで良かったなあって実感しました。そして両親の方も大きく変わったんです。教会に対して賛成の気持ちを持つようになって、偏見がなくなりました。実際、大きな変化です。

石 坂 私も、得たものはたくさんあります。まず証です。それから友人、同胞、求道者たちが立派な会員になってくれたこと。まだまだたくさんあります。伝道の経験をしたということは、ひとつの歴史です。自分の人生の中でぬぐい去ることのできない記録ですね。福音の基礎も、自分のものにすることができました。後の人生にあって

非常にプラスになっています。

増 井 私の心の中に今でも甘く響く言葉があります。それは、「私の宣教師はあなたです」という言葉です。私がバプテスマへと導いた人々がその言葉を語ってくれる時、何にも換えがたい喜びに満たされます。人々との出会いをほんとうに大切にしたいという気持ちを強くすることができました。



石 坂 考えてみれば、人間って無一文になればなるほど強くなるんですね。伝道に出ると収入はもちろんないし、伝道以外やることがないでしょう。無欲ですね。人間って変な欲を出すすと弱くなるんでしょうね。

私にとって伝道とは

司 会 宣教師たちの純粋な愛と奉仕の気持ちは、山をも動かすほどの信仰につながっていますから、強いはずですね。では皆さんに、これから伝道に出ようとする若い方々へ何かアドバイスがあればひとこと…。

神 田 何らかの障害で、伝道をあきらめかけている方へ。努力すれば必ず伝道に出ることができます。その事を忘れないで下さい。それから、日本人宣教師として大切な役割は、同じ言葉で福音をわかりやすく教えるということです。そのためには、福音の知識を基礎からしっかり身につけておく必要があります。証だけでは弱い場合もありますから。

増 井 伝道というのは、ある面では単調な務めです。その単調さに埋没しないで効果的な伝道方法を工夫し、創造的に行なうとよいと思いますね。

クリステンセン 若い宣教師は、時々、自分のことばかり考えて自分の方法で伝道をやろうとします。でも伝道部長は、神様が

ら召された人であり全ての責任を負っています。

自分の考えや方法に固執しないでまず伝道部長を心から支持してやってみて下さい。そうすればその方法が成功への道だと



わかります。その上での創造的伝道なら非常に素晴らしい効果があると私も思います。

天野 私は、これから伝道に出ようとしている方々に「マタイ22：37-40」の聖句をお贈りしたいですね。これは伝道の原点だと思います。

鳥越 伝道の経験は本当の意味で永遠の結婚の準備となります。伝道の期間は、後の人生の土台となりますし、人生を豊かなものとしてくれます。ぜひ、出られると良いですね。

石坂 「今よりも、もっと成長したければ伝道に出なさい」と。必ず成長します。この道は真実ですので躊躇しないで下さい。俗的な事柄にまどわされる必要はありません。神様が必ず助けて下さいます。

司会 どうも貴重なアドバイスをありがとうございます。これから伝道に出ようとする若い人にとって、非常に力強いアドバイスです。

では、最後に皆さんにとって伝道とは、何を意味するのか、短い言葉でけっこうです。教えていただけますか。

増井 伝道とは、証の炎を他の人の胸に転じることに尽きるのではないのでしょうか。

クリステンセン イエス・キリストの僕となって、真面目に勤勉に生活することと想います。

天野 私の場合、福音が真実という証、幸福の証をもって生きることになりました。

石坂 伝道は「奉獻」そのものです。

鳥越 自分の一生の宝であり、生命力の源です。

神田 生活そのものと言えます。夫婦、親子の関係そのものです。生活、それ自体が伝道につながっていますから。

司会 皆さんの力強いお言葉に熱気がみなぎってきましたが、そろそろ時間も少なくなってきました。しめくりとしてお聞きしますが、老後に夫婦で伝道に出たいとお思いですか。

全員 はい、もちろんです。//……(笑)

増井 最愛の妻と同僚になって、ぜひ出たいですねえ。(笑)

天野 私の主人は伝道経験がありませんので、ぜひふたりで出たいといつも話しています。

鳥越 本当に必ずもう一度出たいですね。

神田 これは私たちにとって、大きな目標であり希望です。

石坂 しかし、私が60か70歳の頃はもう福千年が来ているかもしれませんが……でもぜひなしとげたいです。福千年の間でも伝道できるでしょうから。

クリステンセン 私もそう思っています。でも皆には内緒です。この中では私が一番先に出なければならないようですから。(笑)

司会 話はつきませんが、『伝道に捧げたわが青春の一ページ』まさに不滅の輝きをもって皆さんの胸の中に燃え続けていくことでしょう。老年になって再び伝道を終えられたら、ぜひ御夫婦同伴で座談会を開きたいものです。その時にはまた皆さんの御出席をお願いします。

全員 はい、喜んで……。

司会 楽しい座談会でした。いずれにしましても伝道は私たちの人生にとって大切な意味を持っていることがよくわかりました。きょうはいろいろ貴重なお話、本当にありがとうございました。

◇私の熱き思い出◇



東京第5ワード部

福 嶋 克 明

『建築宣教師として捧げた喜びの日々』

1968年5月22日(水)、午前7時40分、約12mの高さの生コン運搬用の昇降機が動き始めた。運転操作をするのは土屋長老。現場の指揮をとるのはラーセン監督。彼の顔は緊張している。昇降機の上には、建築宣教師の面々が輪車で待ち受けている。彼らも同様緊張している。土屋長老の運転は難しい。目印をつけてあるところに昇降機が昇ってくると、彼は素早くレバーを前後に動かして運転を止めるのである。早すぎれば生コンが受け口に入らない。遅すぎると外にこぼれてしまう。タイミングが重要なのだ。試運転の時と違ってやはり緊張のせいだろうか、1回目は見事にオーバーラン、失敗だ。すかさず監督の怒声が飛ぶ。

「しっかり見てやりなさい！」2回目の運転に入る。誰もがこの間、口を開かず、建築現場一帯はピーンと張りつめている。今度は彼は早目に手を動かす。丁度よいタイミングで生コンは受け口に落された。『よしいくぞ。』屋根の上から声がかかった。こうして岡町の教会堂の礼拝堂とレクリエーションホールの屋上のコンクリート打ちが開始され、岡町で最も長い一日がスタートしたのである。その日のために昨夜(5月21日)は遅くまで綿密な計画と機械の点検がなされた。そして今朝は食事を早々に済ませ外に飛び出す。監督を囲んで一日の作業の無事を祈る。監督がいう。『この屋根はきょう一日で終わらせないと失敗する』全員がきょうが最大の難工事であることを理解する。『さあ走ってゆこう』監督の口グセであるこ

の言葉で各自が割り当ての部署につく。

前年の12月16日(土)、渡辺、田中両副国道部長、極東の建築責任者のハーディング御夫妻、現場監督のラーセン兄弟を迎えて行なわれた鉄入れ式の日から5カ月が過ぎていた。この間のことを当時の私の日記から2,3拾ってみよう。

1968・1・12(金) この冬一番の寒い日。建築パーティーが開かれた。宣教師はよく働く。中でも尾関長老の勤勉さが目につく。

1968・1・24(水) 宣教師宅の基礎生コン打ち込み。56m³。よく走っている。

1968・1・29(月) 朝からの雨。アノラックに身をつつんで仕事に励む。雨は容赦なく顔にたたきつける。ラーセン監督は何度も事務所を出たり入ったりして落ちつかない。雨足がおとろえない様子をみて、『中止しようか』と繰り返す。午前中で作業を打ち切る。(以下はその時の詩)

雨降る中で宣教師

びっしり背中を重くして

唯黙々と動いている

雨降る中で宣教師

右から左へ、左から右へ

でもその顔が笑っている

雨降る中で宣教師

教えてくれた唯、2文字

“勤勉”という2文字を

雨の日に限らず、建築宣教師は皆それぞれを持ち場でよく働いた。ある者は毎日毎日鉄筋を曲げる作業を朝から晩まで忍耐強くやり遂げた。その彼に「単調であきない

か」と聞くと、「私はこれが好きなんですよ」と返ってきた。皆んなは素晴らしい教会堂がこの手で完成することを心の中で描いているのだ。だから辛くても不平不満を言う者は一人もいない。何と素晴らしい仲間たちであろうか。しかしこのチームワークは私たちの力だけでできたのではない。良い仕事をしたいという思いは、ラーセン監督によって教えられた。最初に会った時に監督は私に「私はファーストクラスの仕事をします」とはっきりと目標を示してくれた。この思いが全員にある。そして忘れてはならないのが当時の岡町支部の支部長会、扶助協会を中心とした兄弟姉妹たちの協力である。多い時には30名近くを数えた建築宣教師を良く面倒みて下さった。今でも当時の岡町の扶助協会はNo. 1の組織であると思っている。また5月22日の出来事に戻そう。

その日も扶助協会のメンバーは現場に來ている。土屋長老のレバーさばきがスムーズに運んでいる。屋根の上では一輪車がとっかえひっかえ生コンを入れてかけ回る。素人の集りだ。人海戦術でやるしかないのだ。ミキサー車が列をなして待機しているので、昼の食事も食べたのかどうか分らない程、ラーセン監督はほとんど屋根の上で声をからして指揮している。時々降りてきては残りの生コン量をふたりで計算する。1m³でも無駄になると支部の負担が増えるので綿密に計算する。やがて日が傾き出し夜間照明が点灯される。だがまだかなり残っている。監督の顔に不安が走る。宣教師たちの体力ももう限界に近い。だがやり終えなければならぬのだ。気力をふりしぼって向かう。夜9時最後のミキサー車の生コンが上げられる。4、5人の宣教師を除いて後かたづけと整備にかかる。監督と尾関長老、五十嵐長老等5人が仕上げの作業で屋上に残る。彼らが入念に小手仕上げして下に降りたのは深夜の2時。朝起きてから20時間が経っていた。ほぼ丸一日かか

ったわけである。最後の「お疲れさん」の声も出ないくらい疲れ切った我々はベッドに身体を横たえるやいなや、深い眠りに落ちた。この日皆んなはどんな夢を見たことだろうか。

鍬入れ式から1年。献堂式で『この家父なる神に捧ぐ』を歌った時に、一人一人の胸には熱い思いがこみ上げてきた。涙でかすむ讃美歌を見ながら、『やったなあ！やったんだ！ この手で、足で、心で、そして信仰で』と心の中で叫んだ。

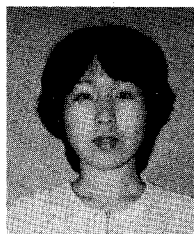
1978年秋に教会堂完成10周年の集いが岡町ワード部で計画された。私も故郷に帰る思いで喜んで参加させていただいた。懐かしい兄弟姉妹の顔がある。しかし当時、熱心に働いた同僚たちの中で今教会に來ていない人もいることを聞いて淋しかった。その時、私は小松長老(当時伝道部長)が私に話してくれたことを思い出した。小松長老は私に「福嶋兄弟、もし建築宣教師を終えて、信仰の弱くなる時があったら、その時はいつでも、あなたが建てた教会堂に帰ってきなさい。献堂された教会堂は少なくとも2、30年はそこに建っています。あなたがそこに戻ると自分が情熱を傾け汗を流して打ち込んだ当時の熱い思いがよみがえって來て必ずあなたを励まして勇気づけてくれます。」

13年経った今も当時の事をふりかえると、一つ一つがあざやかによみがえってくる。そしてあの同じ仲間とまた一緒に働いてみたい気持ちにかられる。1969年に日本を離れたラーセン監督とは1976年4月にソルトレーク・シティで偶然会うことができた。私はワード部の監督として、彼はハワイのステーク部長として大会に來ていたのであった。建築とラーセン監督から私たちが学んだものは『何事にもひたむきに取り組む』という姿勢であった。建築宣教師は自分たちの力で建てた教会堂をこよなく愛している。なぜならそこが私たちにとっての信仰の源だからである。

ある体験を終えて

名古屋第2ワード部

豊田 ふさえ



のできないほどの平安と喜びです。確かに主は生きていらっしゃる私たちの祈る姿を見、その祈りに答えて下さることを証します。

私は家族に感謝しています。伝道に出ることに対して当初ひどく反対していた父に私は毎週、伝道地で得た経験や証を正直に書き送りました。そのうちに父の気持ちが信じられないほどに変わり、私の伝道を心から助けてくれるようになったのです。親元を離れて、今まで思いも及ばなかったほどの両親の愛を知り、私は両親を心から愛すること、尊敬することを学びました。

また、同僚の姉妹たちに感謝しています。伝道を終える時、愛する同僚との別れが一番辛いことでした。私の同僚は日本人よりも外人の姉妹がほとんどでした。彼女たちと一緒に生活していて心を打たれたことが数々あります。慣れない日本での生活に、一生懸命なじもうとする姿勢、また日本人のようになって福音を伝えようとする努力、その日本人に対する愛と献身と犠牲の精神を感じ、何の努力もしていない自分が恥ずかしくさえ思えました。彼女たちを心から愛し、尊敬しています。

私は帰還後、彼女たちからの上達した日本語の手紙をいただくことが唯一の楽しみとなっています。彼女たちの成長した姿や、

伝道で成功した姿をその中で見つける時、本当にうれしくなり、神様や伝道部長、彼女たちの同僚への感謝の気持ちでいっぱいになります。彼女たちの成功は私の喜びです。彼女たちすべてが、みたまの助けによって1年半の伝道を無事終え、故国のアメリカやカナダに帰って行く時、その時こそが私の大いなる喜びでもあると思っています。

最後に、いつも宣教師一人一人の自由意志を重んじ、深い愛をもって正しく導いて下さった坂井伝道部長、また奥様に心から感謝しています。

みちのくの路、東北での伝道生活は遠くなりつつある毎日ですが、あの美しい自然、厳しい冬の生活を通して培われた東北の人人の素朴な、根強い純粋な信仰を、私は決して忘れることはできません。

あの美しい大地で生活したことを恥じないよう今一度、自らの心身をふさわしく整え、清い者になりたいと思っています。そしていつの日かもう一度、東北の地に足を踏み入れたいと願っている毎日です。

確かに救いを得られる道はイエス・キリストのみ名以外にないことを証します。神様が生きていらっしゃることを証し、イエス・キリストのみ名によって申し上げました。アーメン。



夫きくふくらむわが家の夢

東京・恵比寿ワード部 松下 承子

私が神様と出会ったのは1958年の2月のある日のことでした。宣教師の伝道によってもたらされたものです。以来、扶助協会などの集会に出席していくうちに末日聖徒の家庭の抱くべき目標や夢を少しずつ理解するようになっていきました。

わが松下家の歴史は1960年11月3日に始まります。結婚と同時に私は家庭のあり方についてあれこれと夢を抱き始めました。

1)子供たちは幼稚園には入れないで育ててみよう。2)テレビはできるだけ買わないようにしよう。3)教会が子供たちに与えてくれる祝福を、両親の都合によって奪うことのないようにしよう。4)マスコミに振り回されることのないようにしよう、など。

これらのモットーを実行に移しながら、家族の一人一人が大きく成長するのを楽しみにしてきました。

1965年8月の最初のハワイ神殿訪問計画には私たち夫婦はふたりの子供と共に参加させていただきました。当時、私たちの所属する札幌支部は教会堂を建築中で、その間の約2年は、時間的にも経済的にも試練の多い日々でした。しかしハワイ神殿に参入することによって証が強められ、私たちはその厳しい時期を乗り切ることができました。建築時の生活といえば、朝7時半には家を出、建築現場へ行き、まだ幼ないわが子に食事をさせ、その後に建築宣教師の

ために昼食の準備や洗濯などをするという毎日でした。そのような状況にあっても、家庭訪問は欠かさず実行しました。週日のすべての集会も開くように努力しました。毎日よく計画せずに事を始めると、生活のリズムが狂って何もかもが減茶苦茶になってしまいます。家庭訪問の場合は、訪問先のお宅は遠く離れ、しかもあちこちに散在していたため、一日に一軒訪問するのがやっとという状態でした。今、あの頃の生活をふりかえるたびに、時間をもっともっと有効に使わなくてはということをお教えます。

時は過ぎ、家族も増えて娘4人に恵まれました。わが家では、どんな時でも「家庭の夕べ」は必ず行なうことによって、敬虔さと信仰を培うようにしています。結婚当初に抱いた夢はそうにして、だんだんとふくらませてまいりました。

1967年北海道をあとに上京してからはますますその夢は大きくなりました。私や主人、そして子供たちは教会でそれぞれ責任をいただき、集会にはそれぞれ別れて出席することも度々でしたが、夢については挫折することなく、いつも持ち続けてきました。

2、3年前から、夢は現実的な歩みを始めました。それは、4人の娘たちが教会の中に同じ年代の仲間たちが欲しいと考えた

HAPPINESS

幸せ求め旅に出よう
 遠い青い星へ
 自分でみつけた真実を
 守り通すために
 愛を授けに歩き出そう
 長く細い道を
 一人では歩けなくても
 みんなの 愛がある
 行く手は悩み悲しみ
 たたとえ暗い世界でも
 下を向くまい立ち止まるまい
 これが幸せ それが幸せ
 人それぞれ違うけど
 歩く限り、進むがかり
 あの光る星目指して
 Happiness
 Happiness
 Happiness
 歌うはその一言だけ

に苦しい時にあっても歌うことは忘れませんでした。私たちもそのような気持ちで、家族が一致して事を行なう時、どんな苦しみにも負けない不屈の精神と、信仰が築かれていくことを証します。

現在、60曲ほどのオリ

ジナルのミュージカルショーを思い立ったことからです。ショーは1回だけに留まらず、2回、3回と続けられていきました。そうするうちにその内容も充実していきました。やがてそれは会員の活発化につながり、しかも改宗者を得るという良い結果を生みました。青少年の心の中に神様の強い証を得させるお手伝いができたことを、家族共々喜びました。私たちはこの伝道方法をさらに家族ぐるみで続けてみたいと思うようになりました。そして家族は娘の作る歌や物語やダンスを通して、信仰とは、証とは、モルモンとは、と問いかけてきました。

昨年、郷里の北海道に帰った時には、道内8カ所と、東北各地で公演しました。また前橋や高崎、名古屋などにも招かれて公演することができ、各地から「ミュージカルを見て改宗しました」「教会に活発に集うようになりました。」「私たちも始めてみました」というお手紙をいただきました。このようなお手紙は家族にとって何よりの喜びです。感謝の思いで胸が一杯になります。

モルモンの家庭が求めている、また神様が私たちに望んでいる信仰は、厳しい中にも、喜びや楽しさ、温かさが十分味わえるものでなければと感じています。その良い見本を、私は教会初期の開拓者の生活に見ることができると思います。彼らはどんな

オリジナルの中から構成された出し物で、今年も桐生を皮切りに甲信越地方の巡演を計画しています。

私たちは恵まれて、この世の最高の場所神殿で、神聖な業に奉仕させていただき、夢のような毎日を送っています。東京神殿には、奉仕のために、ハワイやソルトレーク・シティからはるばる来て下さっている宣教師の方がいらっしゃいます。この方々は可愛いお孫さんを残し、大切なお仕事を後回しにして奉仕して下さいます。その献身的な姿を見る時、感謝の気持ちで胸のつまる思いがします。

日本に伝道が開始されて80年、その内の20年の歳月を過ごしたわが家の歴史の一頁を紹介させていただきましたが、イエス・キリストの福音の喜びと証を限られた誌面の中から感じ取っていただけたら幸いです。大管長会をはじめ、ワード部、支部、伝道所での多くの人々の働きに心から感謝申し上げます。神様はいついかなる時でも、私たちを愛しお導き下さることを証致します。

「新しい歌を主にむかってうたえ。……主にむかって歌い、そのみ名をほめよ。……主はもろもろの天をつくられた。誉と、威厳とはそのみ前にあり、力とうるわしさとはその聖所にある。」(詩篇96篇)

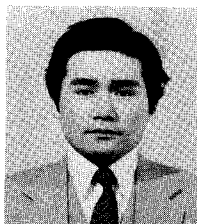
(上の詩は、松下家の長女みはと姉妹のオリジナル曲の歌詞です。)

☆私の証☆

青春の喜び

白子支部

除村 秀輝



伝道に出られる祝福



私はこの4月に24歳になりました。

同級生の間では、結婚話も聞かれるきょうこの頃ですが、私はこれから2年間、伝道に出ることにしました。私は、この日を本当に長い間、待っていたのです。

伝道を決心したのは昨年の7月のことでした。それまで勤めていた会社を8月に辞めて、すぐ伝道資金作りのためにアルバイトを始めました。そして9カ月間勤め、ほぼ目標に近い金額を貯えて、この喜びの日を迎えることができました。しかし、このことは、決して私ひとりの力でできたものではありません。私自身のために毎日面接の時間を取って下さった相良伝道部長をはじめ、いろいろ便宜を計って下さった相良姉妹、地方部の方々、そして励ましや助けを与えて下さった支部の兄弟姉妹、こうした大勢の人々がいればこそ、伝道に出られるのです。そしてこれからも両親の助けなしには決して伝道は成功しないと思います。私をいつも励まし導いて下さった兄弟姉妹、それに両親に心から感謝したいと思います。本当にありがとうございました。私が伝道で祝福を受ける時、彼らも必ず素晴らしい祝福を受けることでしょう。

私は高校2年生の時に教会を知りました。友人と一緒に宣教師に出会った

のがきっかけです。そして初めてのレッスンを受けた後、私は友人と、モルモン経を買いました。しかし、彼は教会に興味を示さなくなりました。モルモン経を、その後ずっと本棚に立てたままで、一度も開くことはありませんでした。そんな彼を見ても何も言えなかった自分の態度が、今思えば悔やまれてなりません。

幼稚園時代からずっと一緒だったその友。彼は北海道のある大学へ進み、そこで応援団員となり、卒業しても家へは帰らず、やがて、やくざ者の世界に入っていました。たまに家へ帰っても、彼の姿を見て避ける人が少なくなかったそうです。彼は私と会うこともなくまた北海道へ戻って行きました。彼は自分の生活を今さら後悔してみてもどうにもならないようです。でも彼には自分が進んで行こうとしている道がどういうものかよくわかっていたと思います。私は周囲の人々が彼をどうすることもできないようにさせたのではないかと思います。

今、彼は家を勘当され、北海道のどこかにいます。だれかが彼をいつも良い方向へと導いていたなら、また励ましていたなら、もっと早く彼は自分の立場に気づいたかもしれません。私たち一人一人が周囲に与える影響は、本当に計り知れないものがあると思いま

す。

イエス様は、「あなたがたは世の光である。……あなたがたの光を人々の前に輝かし人々があなたがたの良い行ないを見て天にいます、あなたがたの父をあがめるようにしなさい」と言われました。私は勇気をもって、彼に義しいものを選ばせる機会を必ず作ってあげたいと思っています。今、力強い模範が必要です。

父に「伝道から戻ってからが大切な」と言われました。仕事を見つけ、結婚をし、そして家族を神様のもとに永遠に導く責任が私にあります。いつも義しい灯台の光を放つならば、決してひとりも道を迷うことはないでしょう。2年間の伝道経験は必ず私の人生に明るい光をともし、強いものにしてくれるでしょう。家族を永遠に導く光は、決して変わることがあってはならないし、またいつも闇の中を明るく照らすものでなければならぬと思っています。

“努力”という2文字の光を絶やさず、全身全霊を傾けてがんばりたいと思います。

神様が確かに生きておられ、私たちを愛し導いて下さっていますことをイエス・キリストのみ名によって証します。アーメン。(なお、除村兄弟は現在日本神戸伝道部にて伝道中です)

宣教師の一日の
生活を追って

伝道に生きる

伝道に捧げる2年間。
それは宣教師たちの生
涯。最も充実した時で
ある。
主のために、献身的に
働く彼らの姿は実に美
しい。ここで彼らの生
活の一部を紹介しよう。



▼家族の写真を傍らに置いて
日本語の勉強中。



▲伝道の足は自転車。



▲同僚を求道者に見たての模擬
レッスン。(家庭集會に備えて)



▲聖典の勉強はこうして毎朝欠かしません。
(全員によるミーティング)



▲改宗へ導こうと宣教師も一生懸命。(家庭
集會にて)



▲「あら、あなた方この前もいらした宣
教師さんネ」(戸別訪問にて)

▼きょうの献立は野菜サラダと水





▲いざ、出陣！（街頭伝道へ）

▼「モルモン教会ヲ、ゴ存ジデスカ」
「はあ？？……」（街頭伝道にて）



▼「少シダケオ話シテモヨロシ
イデスカ」（街頭伝道にて）



宣教師の一日のスケジュール

午前 6 : 30	起床
7 : 00	朝食
8 : 00	ミーティング
8 : 30	個人の勉強
9 : 30	伝道
正午	昼食
午後 1 : 00	伝道
5 : 00	夕食
6 : 00	伝道
9 : 30	反省・計画会
10 : 30	就寝

……。 (昼食)

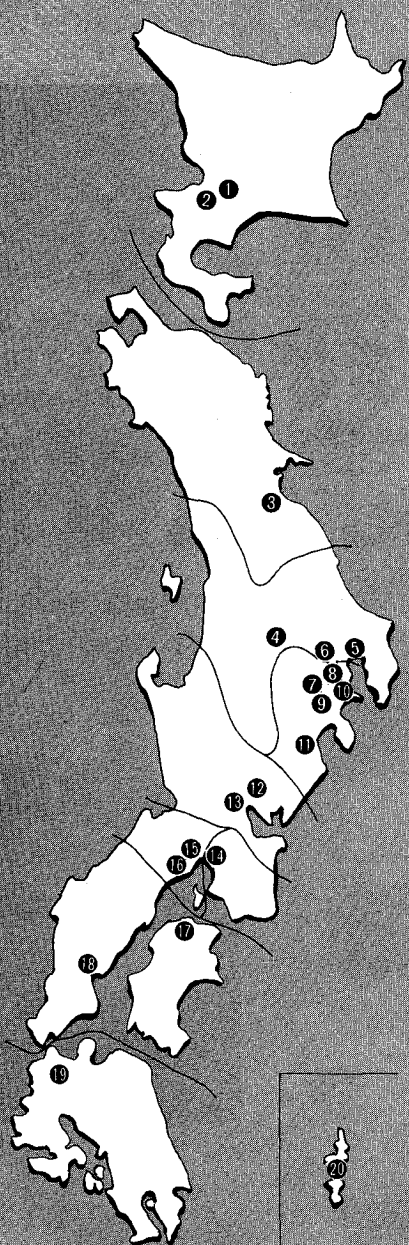


◀一日のうちで最も敬虔なひととき
（朝夕の祈り）

▼「神サマ、キョウモ無事、伝道ヲ終
エルコトガデキマシタ……」（就寝前）



◀きょうの反省とあすの計画が伝道の
成功につながるのです。（自室にて）



日本
札幌
伝道部

〈①札幌ステーキ部〉 札幌第2 W, 札幌第4 W, 札幌第5 W, 旭川W, 旭川西W, 永山B, 豊岡B, 滝川B, 岩見沢B, 士別B, 白石B, 美香保B
〈②札幌西ステーキ部〉 札幌第1 W, 札幌第3 W,

日本
仙台
伝道部

〈③仙台ステーキ部〉 仙台第1 W, 仙台第2 W, 山形W, 福島W, 泉W, 会津若松B, 石巻B, 郡山B, 鶴岡B, いわきB, 古川B, 塩釜B

日本
東京北
伝道部

〈④高崎ステーキ部〉 高崎W, 高崎東W, 前橋W, 桐生W, 岡谷B, 長野B, 松本B, 小山B, 宇都宮B, 熊谷B
〈⑤東京東ステーキ部〉 東京第5 W, 東京第7 W, 浦和W, 千葉W, 船橋B, 鎌ヶ谷B, 越ヶ谷B,

日本
東京南
伝道部

〈⑦東京ステーキ部〉 東京第3 W, 東京第6 W, 杉並W, 府中W, 国立W, 八王子第1 W, 八王子第2 W, 甲府W, 下北沢B, 調布B, 田無B, 杉並第2 B, 富士吉田B, 甲府第2 B
〈⑧東京南ステーキ部〉 東京第1 W, 東京第4 W, 南W, 渋谷W, 恵比寿W, 蒲田B, お茶の水B, 大井B
〈⑨町田ステーキ部〉 町田第1 W, 町田第2 W,

日本
名古屋
伝道部

〈⑫名古屋ステーキ部〉 名古屋第4 W, 名東W, 岡崎W, 豊橋W, 野並B, 豊田B, 春日井B, 刈谷B, 西尾B, 安城B, 瀬戸B, 猪高B
〈⑬名古屋西ステーキ部〉 名西第1 W, 名古屋第

日本
大阪
伝道部

〈⑭大阪ステーキ部〉 大阪第1 W, 大阪第2 W, 大阪第3 W, 堺第1 W, 堺第2 W, 枚方W, 奈良W, 羽曳野B, 大和高田B, 和歌山B, 堺第3 B, 八

日本
神戸
伝道部

〈⑮大阪北ステーキ部〉 岡町第1 W, 岡町第2 W, 茨木W, 高槻W, 池田W, 京都W, 京都第2 B, 宇治B, 大津B
〈⑯神戸ステーキ部〉 神戸W, 姫路W, 尼崎W,

日本
岡山
伝道部

〈⑰高松ステーキ部〉 高松W, 松山W, 高知W, 徳島W, 丸亀B, 鳴門B, 新居浜B, 宇和島B, 今治B

日本
福岡
伝道部

〈⑱広島ステーキ部〉 広島高須W, 広島光W, 五
〈⑲福岡ステーキ部〉 福岡W, 藤崎W, 井尻W, 北九州W, 熊本W, 八幡B, 香椎B, 二日市B, 飯塚B, 久留米B, 大牟田B, 佐賀B, 唐津B, 長崎B, 佐世保B, 清水B, 大分B, 熊本西B, 八代B, 諫早B

か る 末 日 聖 徒 イエス・キリスト 教 会

1981年9月1日現在：
(Wはワード部，Bは支部を示す)

小樽W，室蘭W，新琴似B，手稲B，恵庭B，苫
小牧B，大通りB，小樽東B，西野B

〈釧路地方部〉 釧路B，釧路千歳B，帯広B，北
見B，網走B，釧路千歳第2B

〈盛岡地方部〉 盛岡B，八戸B，青森B，弘前B，
秋田B，北上B

〈仙台伝道部伝道所〉 大館B，一関B，十和田，

水戸B，勝田B，日立B，土浦B，上野B，北千
住B，川口B，小岩B

〈⑨東京北ステーク部〉 東京第2W，東京第8W，
川越W，ひばりヶ丘W，志木B，所沢B，板橋B，
東京北B

町田第3W，大和W，藤沢W，小田原W，厚木B，
平塚B，藤沢第2B，大和第2B，茅ヶ崎B，
〈⑩横浜ステーク部〉 横浜第1W，横浜第2W，
杉田W，大船W，川崎W，横浜駅B，上大岡B，
日吉B，武蔵小杉B，向ヶ丘遊園B，戸塚B，関
内B，横須賀B

〈⑪静岡ステーク部〉 静岡W，清水W，浜松W，
富士W，沼津B，焼津B，磐田B

2W，名古屋第3W，岐阜W，大垣B，高山B，
長良B，一宮B，犬山B，名西B，中村B

〈三重地方部〉 四日市B，白子B，桑名B，津B，
松阪B，伊勢B

幡B，大阪西B，金剛B

〈大阪伝道部伝道所〉 大和郡山B，御坊B，岸和
田B，和泉府中B，泉南B，田辺B，東大阪，忠

西宮W，明石W，加古川W，福崎B，鈴蘭台B，
相生B，三木B，西脇B，東灘B，三宮B，灘B
〈福知山地方部〉 福知山B，彦根B，豊岡B，洲
本B

日市W，徳山W，広島安古市B，福山B，岩国B，
柳井B，呉B

〈岡山地方部〉 岡山B，岡山西B，倉敷B，津
山B，鳥取B，米子B，松江B

〈⑫沖縄ステーク部〉 那覇第1W，那覇第2W，
首里W，普天間W，小禄W，名護B，具志川B，
浦添B，沖縄B，与那原B

〈鹿児島地方部〉 鹿児島B，宮崎B，名瀬B，都

〈函館地方部〉 函館B，函館松川B

〈札幌伝道部伝道所〉 稚内B，江別，登別，根室
北西，釧路東，帯広，昭和，名寄，滝川第1，苫
小牧，室蘭，西根

宮古，原町B，米沢，酒田B

〈新潟地方部〉 新潟B，新潟第2B，三条B，長
岡B

〈東京北伝道部伝道所〉 足利，大宮，上福岡，高
田馬場，巣鴨，大泉学園，足立，文京区

〈東京南伝道部伝道所〉 大井町B，代々木第1B，
代々木第2B，広尾B，目黒B，五反田B，立川B，
吉祥寺B，千歳烏山B，明大前B，自由ヶ丘B，
三軒茶屋，千歳船橋，二子玉川，成城，学芸大学，
仙川，小金井，阿佐ヶ谷，聖蹟，豊田，市ヶ谷，
四ツ谷，吉祥寺南，荻窪，静岡，浜松，富士宮，
島田，伊東，吉原，三鷹，渋谷，大森，飯田橋，
下高井戸，原宿，八王子，甲府，西荻窪

〈北陸地方部〉 金沢第1B，金沢第2B，金沢第
3B，福井B，小松B，富山B，高岡B，

〈名古屋伝道部伝道所〉 金沢南，尾張旭，鶴沼，
藤ヶ丘，金山，大曽根，猪高，岩倉，岩田，中川

岡，北野田，福島

〈神戸伝道部伝道所〉 吹田，山科，御影，須磨，
伊丹，岡本，芦屋，元町，三宮，尼崎，烏山，堀
川，京都西，三条，京都駅，舞鶴，深草，西院，
大宮

〈山口地方部〉 山口B，宇部B，下関B，防府B

〈岡山伝道部伝道所〉 倉吉，出雲，笠岡，尾道，
小野田，川之江，西条，阿南，伊予三島

城B，鴨池B，延岡B

〈福岡伝道部伝道所〉 日向，日南，コザ，川内，
谷山，石垣，八代，行橋，上大利，南宮崎，北宮
崎，宮古，国分，北佐世保，志免町，本部，下大利

日本における教会の統計記録

(以下は管理監督会アジア地域管理本部と教会教育部
からの1981年7月末現在の報告に基づくものである)

教会ユニット		扶助協会会員	19,586
牧師本部	20	長老見込会員	5,484
伝道部	9	若い男性	5,565
青少年部	87	若い女性	3,986
支部	204	プライマリー	3,734
地方部	12		

教会員

教会員総数	55,441
バプテスマ受洗者	3,212

教会教育プログラム 1981年度登録者数

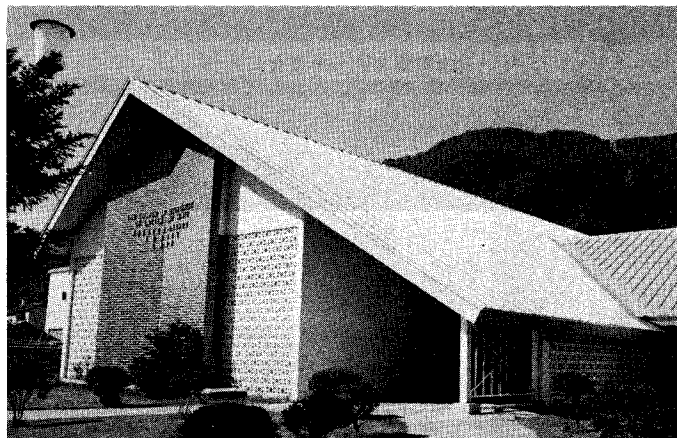
セミナー	1,602
インスティテュート	3,581



すなつぶ◎教会堂

私たちの信仰を育んでくれる主の家、教会堂。現在、それは全国各地30数カ所に建てられています。その美しい建物のいくつかを写真で追ってみましょう。

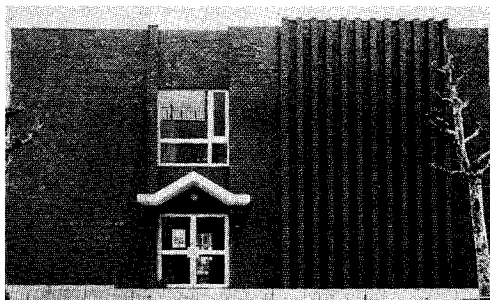
北海道



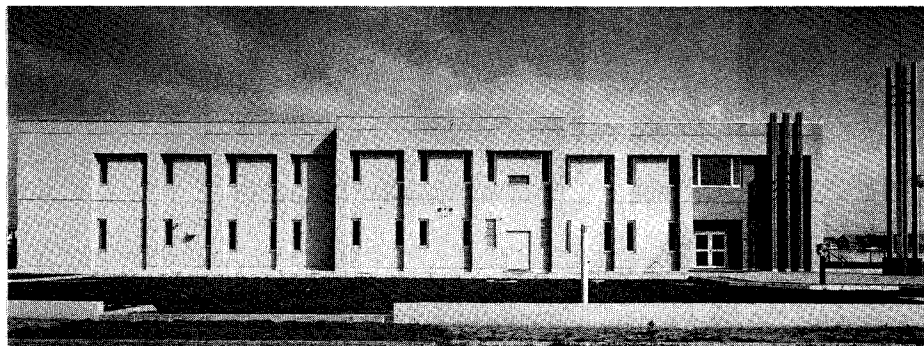
▲札幌第1ワード部



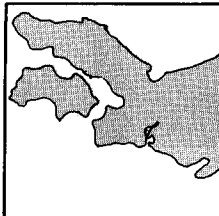
▶小樽ワード部



▼旭川西ワード部

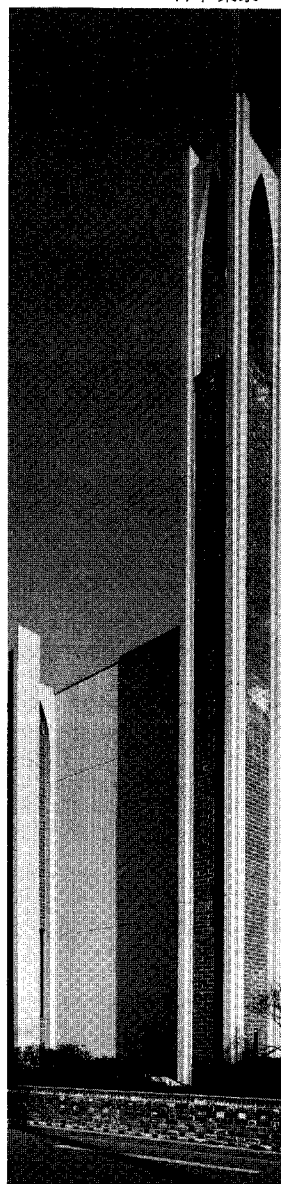
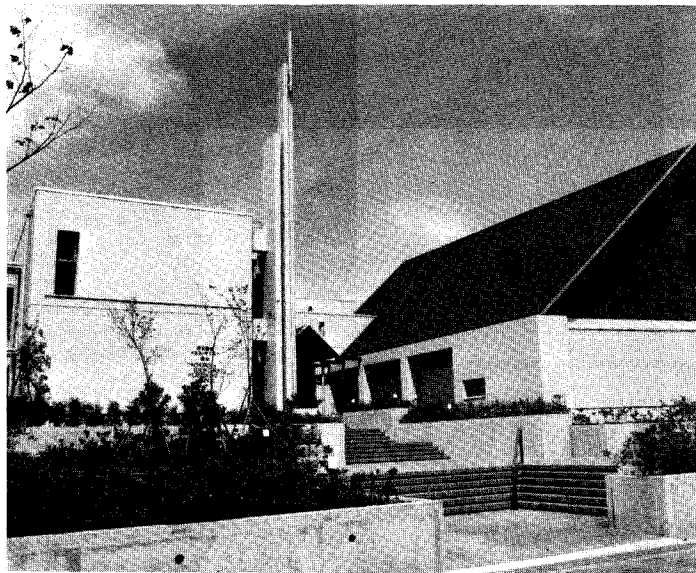


本 州

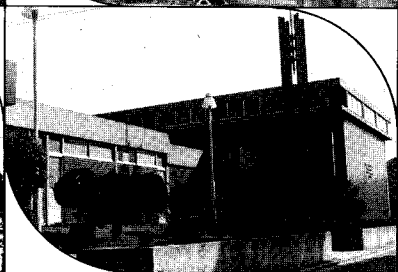
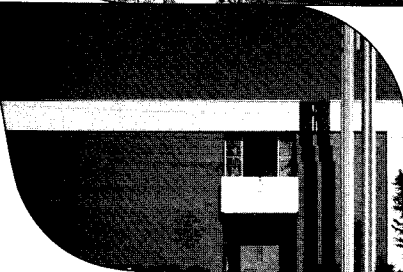
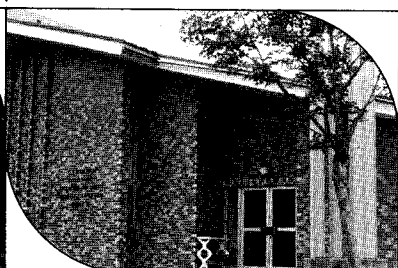
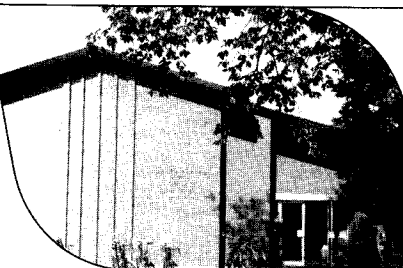


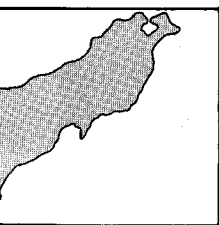
日本町田ステーキ部センター

日本東京ス

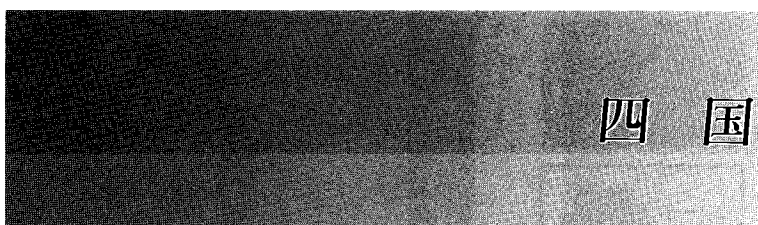


仙台ワード部	金沢支部
名古屋第4ワード部	岡町ワード部

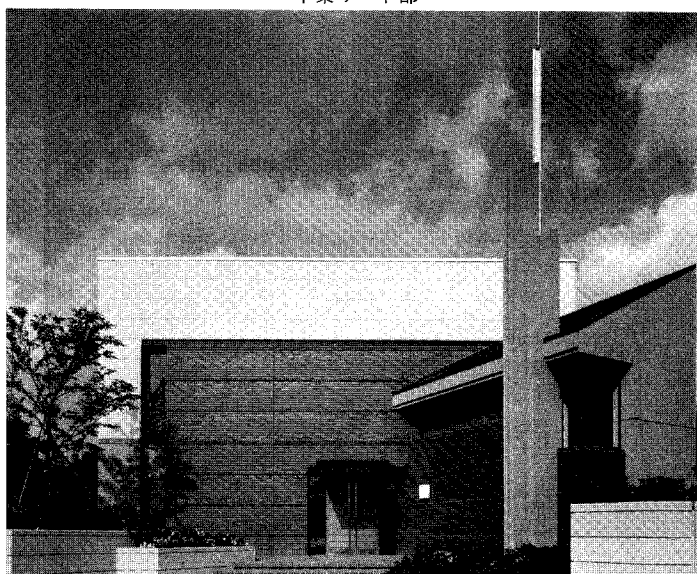




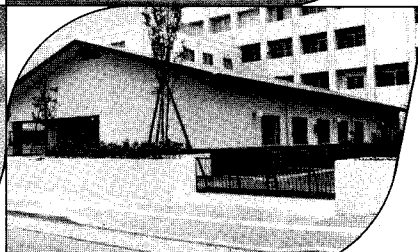
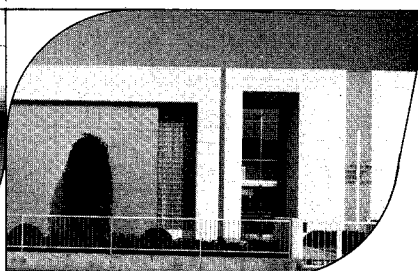
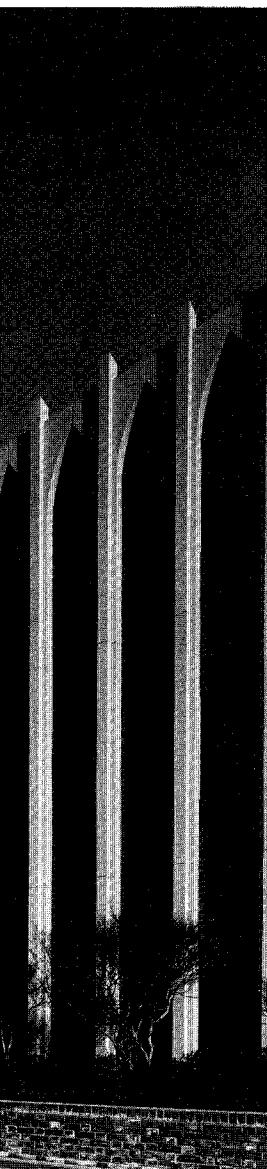
キ部センター



千葉ワード部



京都ワード部	岡山支部
広島高須ワード部	高松ワード部



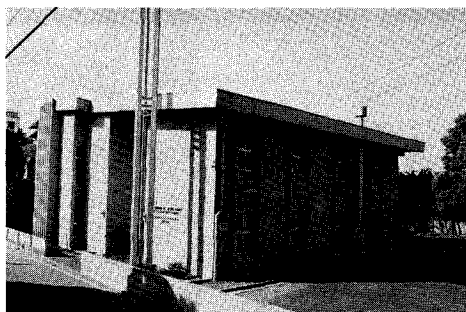
九州



沖縄



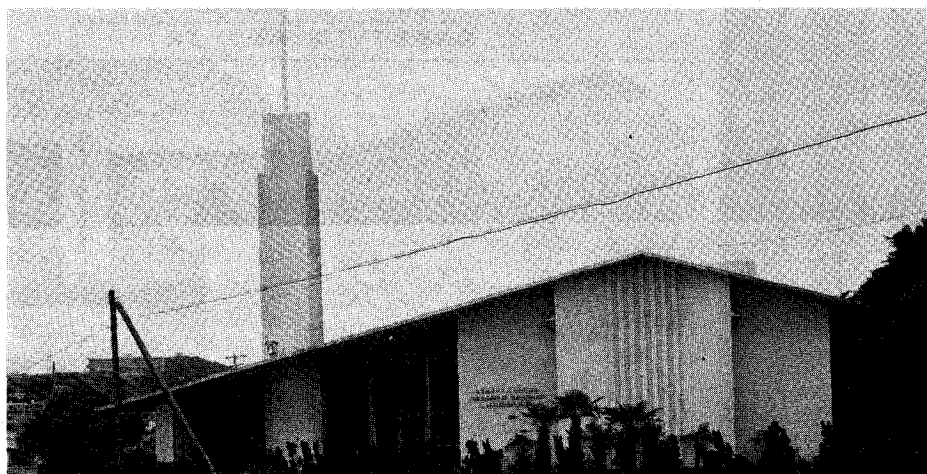
北九州ワード部



福岡ワード部



那覇ワード部



普天間ワード部

教会幹部

✧日本の伝道について語る✧

私たちは日本における伝道部の開設が、東洋への福音伝道の扉を開く鍵となることを心から信じている。福音の力は、必ずや日本を通して東洋の国々にもたらされるであろう。氷は砕かれ、障害は取り除かれ、福音はアジアの他の国々へ広まっていくことだろう。

チャールズ・W・ベンローズ(1902)

日本には、私が今まで聞いたこともないような、また教会歴史にもないような伝道の可能性がある。私たちはそこに驚くべき可能性を見た。宣教師をさしむければ、人々は教会に加入する。福音を知りたいのである。

マシュー・カウリー(1949)

主の時をもってすれば、扉は今や開かれ、アジアにおいて主の業が行なわれる時である。私は日本を訪問するたびに、この地が発展し、成長を遂げるだろうという靈感をうける。

エズラ・タフト・ベンソン(1970)

編集後記



◀素晴らしい“収穫の秋”を迎えた。この季節がまた、芸術の……、読書の……などとも形容されるのは、人の心を誘う独得の趣きがあるからであろう。

◀黄金の波ゆらぐ田園の風景。これは何にもかえがたい喜びの絵ではないだろうか。伝道80周年を迎えた日本の教会の姿はまさにそれに象徴されるようだ。

◀今回の記念特集号の企画に際しては、全体的にそんなイメージを崩さないよう、配慮したつもりである。内容においてはまだまだ迫力に欠ける面もあるが、皆さんに少しでも喜んでいただければ幸いである。

◀最後に、本誌作成のために、いろいろ協力して下さった関係者一人一人に心より感謝申し上げたい。

(N.S記)

